

石組遺構

旧河道1-a南半部で検出した。石組遺構は河道肩部から陸橋状にのびる砂堆を切込み、北西から南東方向を主軸として、小石室状に構築されている。内法は、長軸0.8m×短軸0.4mを測り、0.5~0.6m大の花崗岩礫でもって、3段に積み上げられている。さらに小石室内には、須恵器の杯身、杯蓋が側壁に平行に置かれており、それを取り囲むかのように0.1~0.2m大の角礫3個が配置されていた。

集積遺構

調査区の北半部にて検出した。0.5~0.6m大の花崗岩礫が不規則に積まれていた。

土坑10~18

調査区の北半部にて9基検出した。どれも形状は不整形であり、断面は浅い皿状を呈するものや2段に落ち込むものなどがある。土坑からは、土器細片などがわずかに出土するのみであるが、土坑17・18からは、板材等が出土している。



fig. 107 石組遺構 SX25 棟出状況



fig. 108 石組遺構 SX25 遺物出土状況

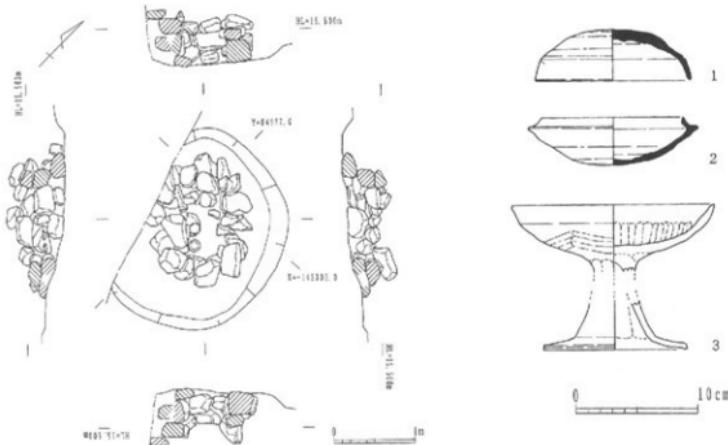


fig. 109 石組遺構 SX25 平面図・立面図及び出土遺物実測図

- 第3遺構面** 調査区全体を覆う洪水堆積層（第6層）を人力にて除去した段階で旧河道・旧河道1-b（古墳時代中期～後期）b・旧河道2と杭列3を検出した。
- 旧河道1-b** 旧河道2との合流点にて、木製品や土器を多数検出した。層位的には中層下部～下層のほぼ上面に集中し、かつ、土器は比較的完形に近いものが多いことから、流れ込んだというよりも付近から投棄された可能性が高い。また、木製品の鉢の身の完形品が河道北半部にて出土している。
- 旧河道2** 東西方向に流れる旧河道である。幅5.8m、検出長5.6mを測る。
- 杭列3** 旧河道1-bの北半部の肩部にて検出した。45°～30°の角度でもって河道肩部にむけて打込まれており、河道の護岸に関係するものであろう。
- 出土遺物** コンテナで22箱の遺物が出土した。そのうち土器は14箱、木器7箱、その他（埴輪・石器・鉄器等）1箱である。古墳時代中期～近世のものが出土しているが、中でも古墳時代中期～後期の土器や木製品が多く、飛鳥～平安時代の土器・木製品がそれに次ぐ。土器類の中では、古墳時代中期～後期の須恵器が圧倒的に多く、杯身・杯蓋・提瓶・翫・甕・壺などの器種がある。埴輪は数点出土しており、須恵質のものと土師質のものがある。他の紡錘車や叩き石、土鍤なども出土している。木製品は、古墳時代～平安時代のものであり、鋸先・槽・刀形木製品・建築部材・杭等がある。



fig. 110 第3遺構面 平面図



fig. 111 第3遺構面 全景



fig. 112 旧河邊 木製品出土状況

3.まとめ

今回の調査成果の主なものは、占墳時代中期～平安時代の河道と飛鳥時代の石組状遺構を検出した点にある。中でも旧河道1-bの木器・土器集中部からは、比較的完形に近い須恵器等が多数出土しており、河道周辺から投棄された可能性が高い。調査地の周辺では、第14次調査地や第11次調査地において、同時期の堅穴住居が検出されており、この付近の居住域の様相を考える上で重要な資料となろう。

住吉宮町遺跡の古墳時代後期の遺構は、これまで方墳20基以上、堅穴住居20基以上が検出されており、それ以外にも溝・旧河道・水田等が検出されている。また、郡家遺跡からも多数の堅穴住居が検出されており、両遺跡を一つの集落の広がりと考え、西摂地域における古墳時代後期の大集落と捉えることもできる。ただ、その広がりに比べて、古墳時代後期の微地形や遺構のデータはあまりに点的であり、居住域や墓域の広がりや変遷を追うことは難しい。そのような状況のなかで、これまでとは、やや異質のデータを提示できたことは、集落の実態にせまる上で一つの成果とみることができよう。

また、飛鳥時代の石組状遺構は、その形状から埋葬施設の可能性が高いが、その検出位置が河道内にあたる点、さらに周辺域の調査において、墓域が検出されていない点など、現状では判断できる材料は十分でない。さらに、祭祀の面からの可能性も考える必要がある。類例等の増加を持って今後の検討課題としたい。

最後に、奈良時代～平安時代の遺物には、須恵器転用硯・紡錘車・建築部材等がある。今回調査地の北方に位置する第14次調査地においても、奈良時代の掘立柱建物や井戸等が検出されており、住吉宮町遺跡における律令期以降の状況を把握する上で、参考資料となろう。

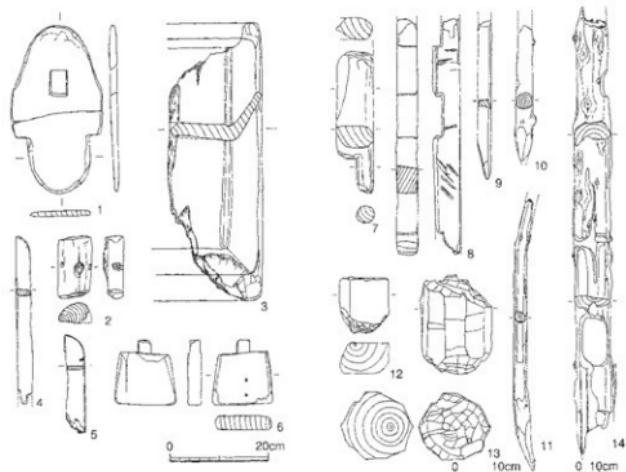


fig. 113 旧河床 出土木製品実測図 (1: 砧 3: 檜 4: 刀形 7・8・14: 建築部材 9~11: 杣)

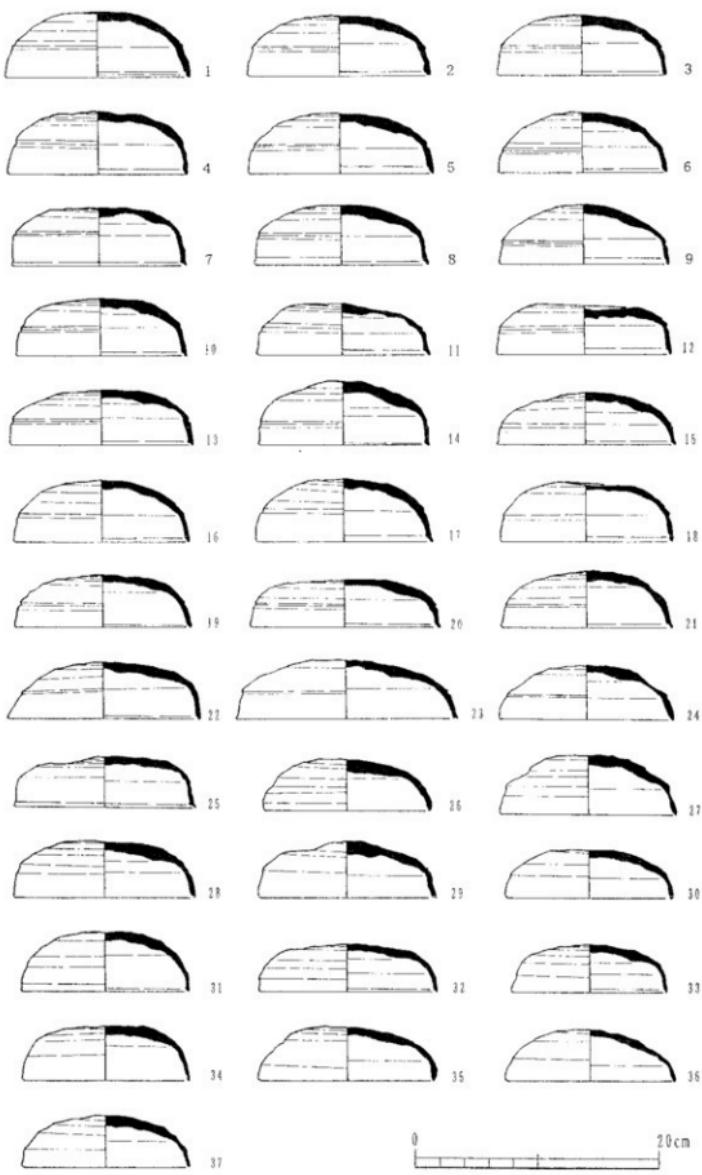


fig. 114 旧河道1出土遺物実測図

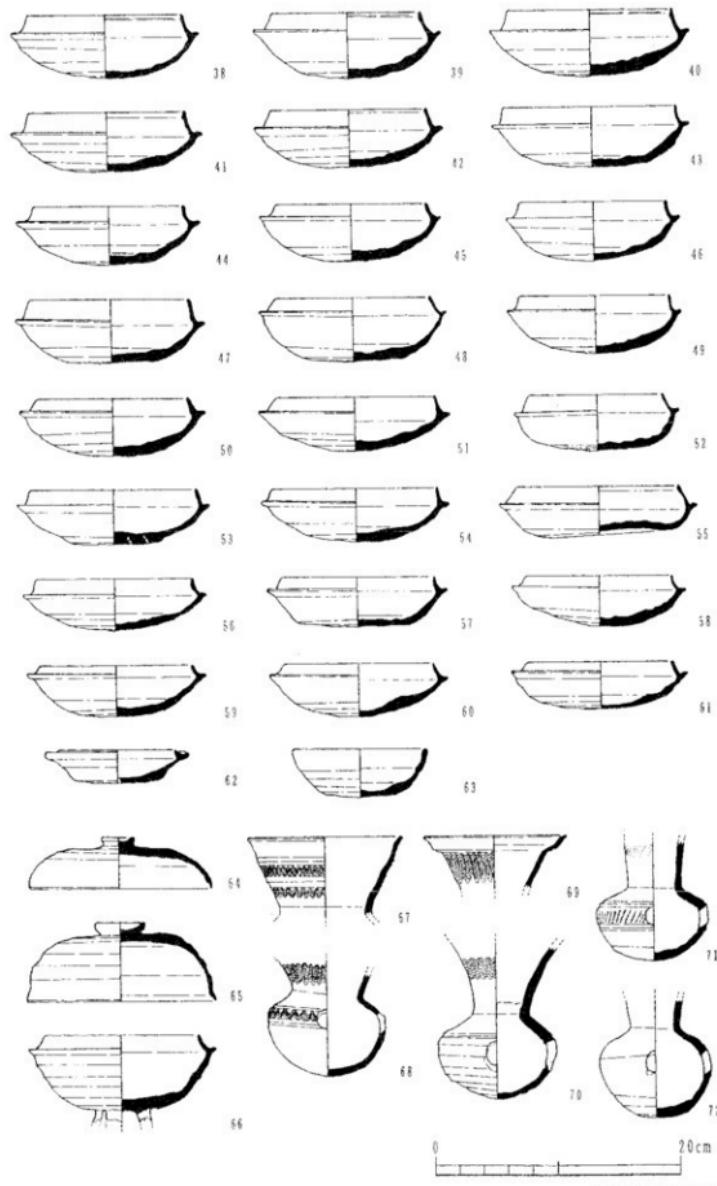


fig. 115 旧河道 1 出土遺物実測図

すみよしみやまち 16. 住吉宮町遺跡 第21次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は、六甲山南麓の東を住吉川と西を石屋川に挟まれた標高20m前後の複合扇状地に立地している。これまでに20次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代中期・終末期の水田と集落址、古墳時代後期の古墳群と集落址、奈良時代から平安時代の集落址、中世の集落址が発見されている。



fig. 116
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

基本層序

今回は、共同住宅建設に伴うもので工事影響範囲部分について発掘調査を実施した。

現状地盤より80cmは盛上であり、T.P.20,860mで近世耕作土層が確認された。第1層（T.P.20,750m）黄褐色砂質土が第1遺構面の上層であり、第2層（T.P.20,670m）茶褐色砂質土が第1遺構面（奈良時代）を形成する。第3層（T.P.20,540m）褐色砂質土が第2遺構面（古墳時代末）を形成しており、第4層（T.P.20,400m）暗茶褐色シルト質細砂が第3遺構面（古墳時代後期）を形成する。各遺構面は南に緩やかに傾斜している。

第1遺構面

東西2間、南北4間の柱穴の掘立柱建物1棟と散在するピット群が検出された。掘立柱建物は、南北棟で柱穴間距離は、2~2.2mで、柱穴の直径は40cm前後である。

建物の南辺部には、地面を均したように不定型の落ち込みが検出された。時期は、出土遺物から奈良時代（8世紀）と思われる。

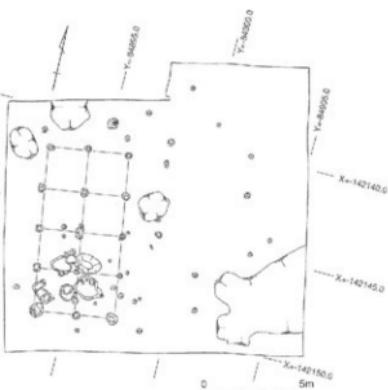


fig. 117 第1遺構面平面図

第2遺構面 ピット群と溝、土坑、竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟が検出された。掘立柱建物は、東西に5間、南北に1間以上である。1間の幅が1.2mと狭く柱穴の直径は、40~80cmと比較的大きい。竪穴住居は2棟とも方形で、北辺にカマドが検出された。調査区と搅乱により建物規模は不明である。北側の竪穴住居のカマドの西には何かを据えつけたような跡みを検出した。時期は、出土遺物から古墳時代末（6世紀末~7世紀初頭）と考えられる。

第3遺構面 ピット群と竪穴住居1棟が検出された。竪穴住居は一辺4.4mの方形のものである。調査区南東隅にも大きな落ちが検出されたが、周壁溝などが見られないため竪穴住居として確定したい。ピットについては、直径60~80cm、深さ65cmの規模であるが、規則的に検出されないため建物にはならない。出土遺物から古墳時代後期（6世紀）と思われる。

3.まとめ 今回の調査地は、周辺の試掘調査の成果にから西に河道が検出されたおり集落域の最西端に位置していると考えられる。この地点において、古墳時代から奈良時代の住居址を検出することができた。このことは、西に隣接している郡家遺跡と住吉宮町遺跡の集落の移動と墓域の移動を考える上で重要な資料といえる。



fig. 118 第2遺構面 全景



fig. 119 SB301



fig. 120 第2遺構面平面図



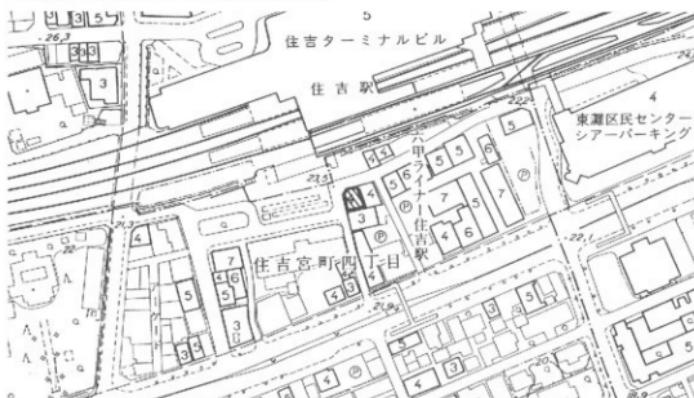
fig. 121 第3遺構面平面図

すみよしみやまち 17. 住吉宮町遺跡 第22次調査

1. はじめに

今回の調査地は、平成7年度から平成8年度に実施された第19次調査の北隣接地にある。第19次調査においては、中世後期から近世及び平安時代の掘立柱建物、古墳時代後期の古墳3基、弥生時代後期の土坑が検出されている。周辺の調査においても古墳時代後期の古墳群が確認されている地域にあたる。

fig. 122
調査地位図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うものであるが、震災前は4階建鉄筋コンクリート造の建物があった場所である。従前の基礎で遺跡が破壊されている可能性があるため、解体工事時にあわせて試掘調査を行った。その結果、遺物包含層が確認されたため工事影響範囲及び深度までの発掘調査を実施した。

調査の結果、奈良時代（第1遺構面）、古墳時代末（第2遺構面）の2面の遺構面を検出した。

基本層序

今回調査した地点は、JR住吉駅の南出口に面しており、はやくから市街地が形成された地区であるため、かなり擾乱が多く、層序も大きく乱れていた。

現状地盤より110cmは基礎や区画整理前の水路などの影響を受けていた。調査区の南東隅は、前の建物の浄化水槽があったため、かなり深い擾乱を受けていた。T.P.22,000mで黄褐色砂質土の第1遺構面（奈良時代）が検出され、T.P.21,900mで黒褐色砂質土の第2遺構面（古墳時代末）を検出した。



fig. 123 第2遺構面 全景

第1遺構面 ピット群と溝、土坑を検出した。ピットの直径は20~50cmである。ピットは60基程度検出されたが、掘立柱建物としてまとまるものはなかった。溝は、東西方向に幅80cm、深さ12cmが確認された。時期は、出土遺物から奈良時代（8世紀代）と思われる。

第2遺構面 溝と大きな浅い落ち込みを検出した。溝は、東西方向に幅1.2m、深さ16cmが確認された。大きな浅い落ち込みは調査区の北半の大半を占めている。深さ40cmの落ち込みで、出土遺物の量も少ないため、自然の落ち込みと思われる。

3.まとめ 今回の調査区は、狭い範囲の上、擾乱が多かったため遺跡としての位置づけはできないが、南に隣接する第19次調査地からは、下層において更に古い時期の遺構が確認されているため、今後更に深い掘削を伴う開発を行う場合は調査が必要である。

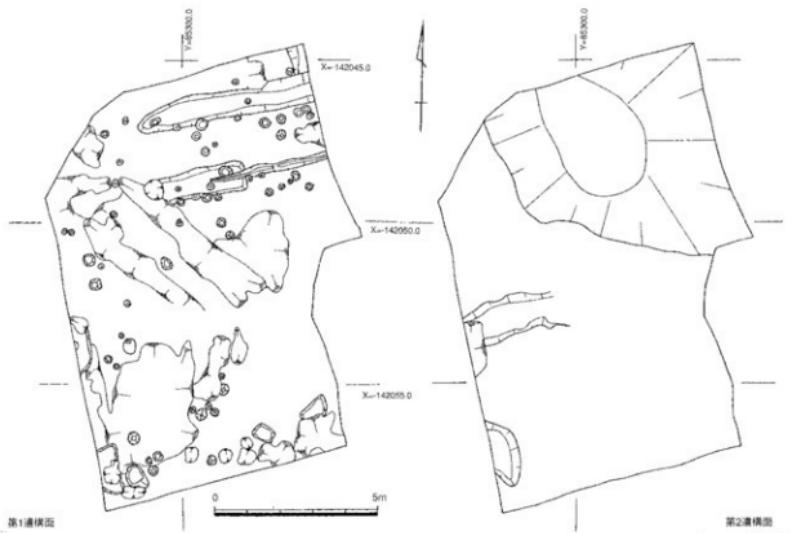


fig. 124 調査区平面図

すみよしみやまち 18. 住吉宮町遺跡 第23次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は、これまでの調査で弥生時代から中世・近世に至る複合遺跡であることが判明している。今回の調査地は、この遺跡の範囲内にあり、阪神・淡路大震災の復興に伴う開発で、共同住宅（マンション）建設の計画があったため、当該地において全面調査を行ったものである。なお、本調査区の西側の隣接地では1993年に神戸市教育委員会によって発掘調査（第14次調査）が行われている。



fig. 122
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

第1 遺構面

今回の調査では中世と古代の2面の遺構面が検出されている。以下、順に記す。

洪水層下の暗黄褐色の粗砂層（I層）で溝3条（SD01～03）が検出され、これから中世陶器が出土している。

溝は3条並行して検出された。形状は、調査区の西端から東伸し、10m程の地点で南折しており、全体的には「L字状」を呈する。規模は、確認された部分では長さ13m、幅50～80cm、深さ10～20cmある。中央のSD02は2時期の重複が認められ、堆積土の観察からSD01とSD02古、SD01とSD02新が同時期に機能したものと考えられる。なお、それぞれの溝の心々距離は3mある。溝の配置や形状から道路の側溝の可能性がある。

中世陶器はSD02から出土している。常滑窯の窯で13～14世紀の所産と考えられる。

第2遺構面

井戸 SE06

この時代の遺構には井戸跡1基（S E06）、掘立柱列2条（S A07・08）、打ち込み杭を伴う自然流路跡（S D04・05）、土坑多数が検出されている。

井戸枠を有する井戸で、3.3m×2.6mの長円形の掘形を掘り、その中に一辺1.4mの正方形の木組の井戸枠を作っている。

井戸枠は、隅柱・横板・縦板で構成されており、木組は四隅に柄を切った隅柱を立て、それに横板材をはめ込み、その後の部分を補強として縦板で押さえるという構造である。

横板は東西の壁面で4段、補強の縦板は南壁で6枚、北壁で7枚検出されている。

部材の規模は、隅柱が残存する部分で長さは約1.7m、太さ18~20cm、横板は長さ120cm、幅30~60cm、厚さ3~4cm、縦板は残存する部分で長さは約1m、幅10~20cm、厚さ約1cmである。

また、横板は柵目の材が用いられ、井戸の内側になる部分は丁寧に手斧仕上げされている。樹種については未調査である。

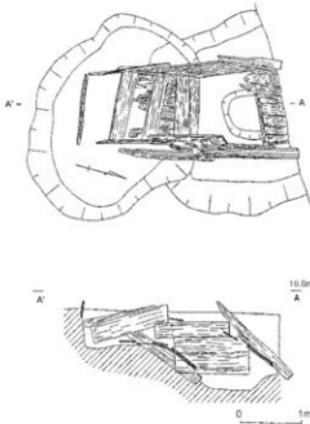


fig. 126 SE06 平面図・断面図

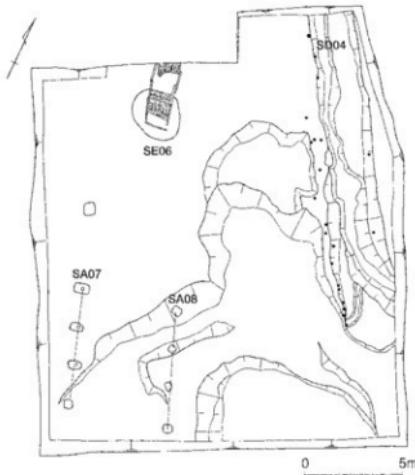


fig. 127 第2遺構面平面図

S E 06検出状況 ところで、この井戸で注目される事には、その検出状況がある。

井戸枠は、全体が南側に倒れ込んだ状態で検出されており、隅柱は約40度の角度に倒れ、横板が南にスライドしている。さらに、掘形も井戸の底面から約74cm付近で上の部分と下の部分が千切れ、上半部が南にずれて検出されている。この中で南壁の横板では最下位のものと上位のものには約1.9mものずれが計測されている。こうのような「ずれ」は井戸の上半部が南に地滑りを起こしたために生じたものと考えられる。

地滑りを起こしている面はⅡ 2層の黒褐色細砂層とⅡ 3層の黒褐色シルト質細砂層の層理面に対応する。さらに、地滑りの要因については、この層理面には地滑りを引き起こすような粘土層はみられないところから洪水などによるものとは考えられない。一方、地滑りを引き起こしたⅡ 3層・Ⅱ 4層は、この地域の地下水位が高いことや、層を構成する砂の粒度などから、地震などの際に液状化現象を起こしやすい地盤であると考えられている。さらに、本遺跡の他地点では、これまでの調査により地震による地盤変動のひとつである噴砂や地割れの痕跡がみとめられている。これらの状況から本地点における地盤変動も地震に起因するものと考えられ、これにより液状化現象を生じ傾斜の下がる南側に地滑りしたものと考えられる。

なお、この井戸が構築されて以来（8世紀後半）、この地域を襲った大地震（地盤変動を伴うようなもの）には1595年に発生した「慶長・伏見地震」があるので、本遺跡で検出された地滑りもこの地震に伴うものと考えられる。



fig. 128 SE06

掘立柱列

S A07・08は南北に並ぶ掘立柱列で、確認された部分でそれぞえ3間検出された。約5.0mの間隔で並行して検出されており、掘立柱建物跡である可能性もあるが、ここでは対応する柱の配置にずれがみられることから掘立柱列として扱う。

S A07は柱間寸法が南から2.6m、2.5m、2.6mで、全長6.2mである。柱穴は40×60cmの方形を呈し、直径約15cmの柱痕跡が検出された。

S A08は柱間寸法が南から2.6m、2.5m、2.6mで、全長6.2mである。柱穴は40×60cmの方形を呈する。柱痕跡は検出されなかった。

出土遺物

遺物には、S D04・05やS E06を中心に土師器（壺・甕・蓋）、須恵器（壺・高台壺・高壺・甕・蓋・壺・甕）、瓦（平瓦・丸瓦・軒丸瓦）、木製漆器椀・円面鏡・土鍤・土馬・埴輪・婧壺などがある。

この中で、S E06から出土した土師器壺には「橘東家」・「免」の墨書きが認められるものがあり、特に後者は当時のこの地域の郡名である「菟原」の文字の一部にあたることや、兔の誤記ともとれるもので注目される。また、これらの土師器の年代は、形状や調整が平城編年のIV～V期のものと類似することから8世紀後半に位置付けられよう。



fig. 129 SE06 出土墨書き土師器

3.まとめ

今回検出された遺物の中には瓦・円面鏡・墨書き土器などが多数含まれている。また、S E06に使用されている部材についても一般集落から供給されたとは考えにくい。このように、本調査で検出された遺構・遺物には官衙的な色彩が色濃くみられる。このことから本遺跡は、当時この周辺に存在したとされる「菟原郡衙」と密接な関連があったものと考えられる。

また、今回の調査では、地震による液状化現象に伴う地滑りによって破壊された井戸跡（S E06）が検出されている。このような資料は当時の地震の実態を知るだけでなく、地震災害を研究する上で注目されるものである。

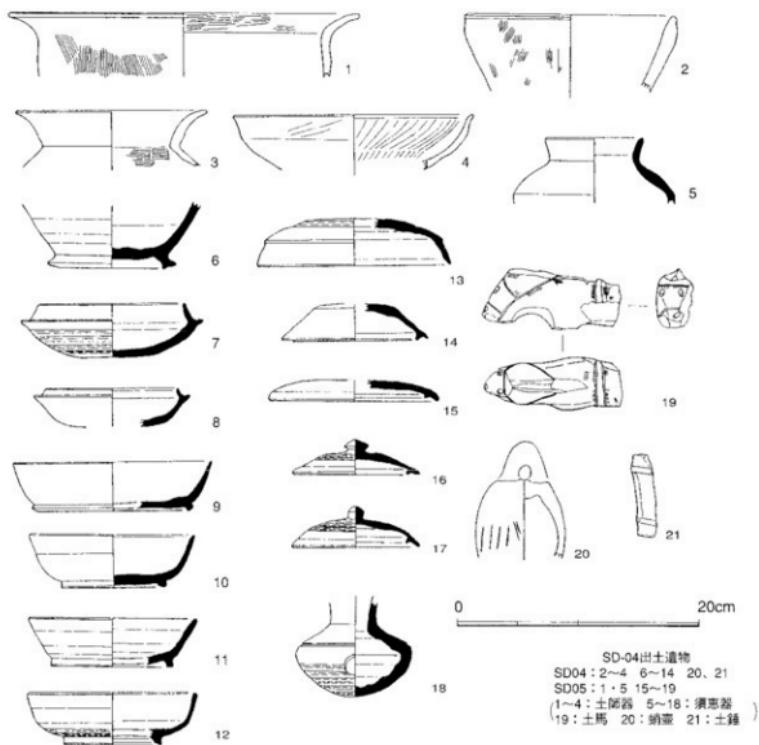
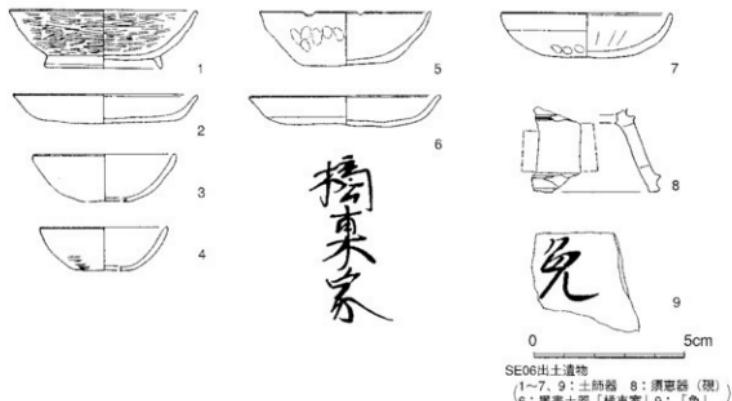


fig. 130 出土遺物実測図

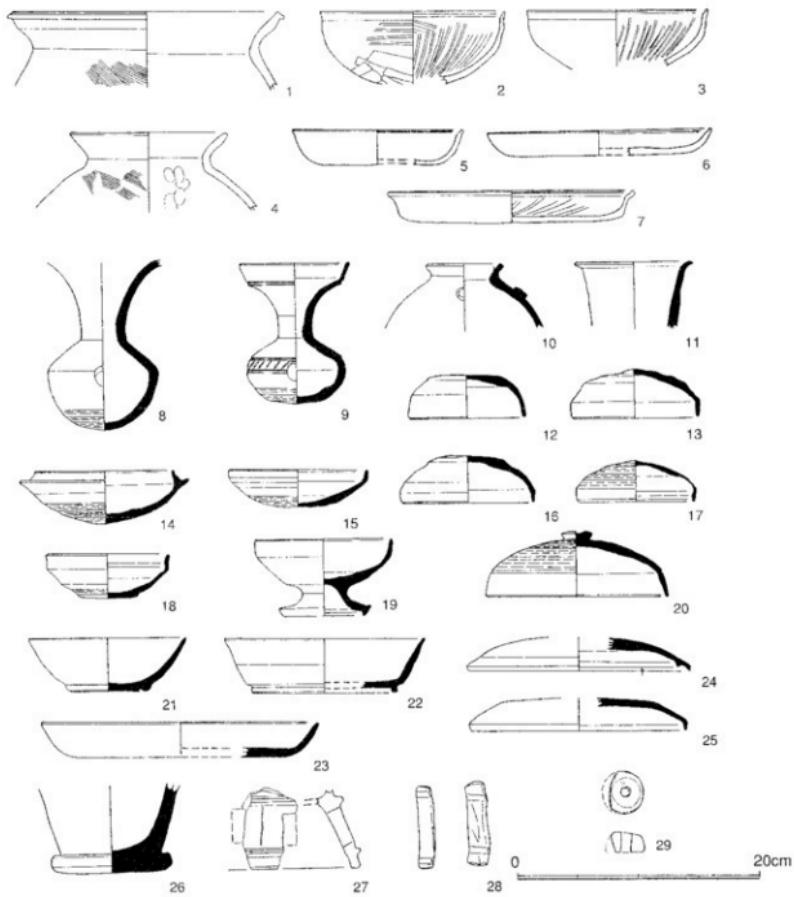


fig. 131 I + II 層 出土遺物実測図
 (1~7: 土器 8~26: 瓷器 27: 瓷器(内面鏡)
 28: 石錺 29: 石製敲撃器)

ぐんげ
19. 郡家遺跡 御影中町地区 第6次調査

1.はじめに

今回の調査は、震災後の社屋再建に伴うもので、工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲と深度に關し、発掘調査を実施することになった。



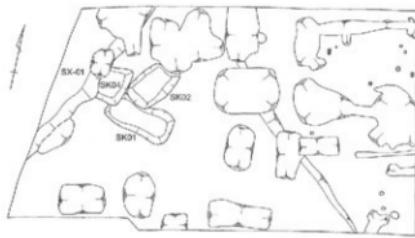
2. 調査の概要

基本層序

近現代の造成土・擾乱、江戸時代以降の旧耕作土・床土の下で、江戸時代のある時期に耕作地を造成した時の盛土と、その下に埋められた旧耕作土を確認した。盛土中には江戸時代から弥生時代までの土器が大量に含まれている。以下、暗灰色粗砂、褐色系の砂質土が6層、暗灰茶色砂質土、暗茶色砂と続くが、各層の出土遺物から灰黄褐色砂質土上面が室町時代頃、茶褐色砂質土上面が鎌倉時代頃の遺構面と考えられる。また暗灰茶色砂質土上面が平安時代頃、暗茶色砂上面が古墳時代頃の遺構面の可能性があるが、工事影響深度内ではわずかな面積しか調査できなかったため、今回遺構は確認できなかった。

第1遺構面

室町時代頃の遺構面であるが、耕作地造成時の盛土下の旧耕作土上から掘り込まれていた江戸時代の土坑SK01・02・04と性格不明の遺構SK01もこの面で検出した。



ピット 耕作地の段差によって北東側が高く、その部分でピットを12基検出した。ピットの直径は10~50cmであるが20cm前後のものが多い。深さは10~20cmである。いずれも建物を構成するかどうかは不明である。

S K01 長さ4.2m、幅2.1m、平面の形状は不整である。深さは約80cmまで掘削したが、工事影響深度を越えてさらに続いているため底は未検出である。

S K02 長径3.5m、短径2mの楕円形である。深さは約70cmまで掘削したが、影響深度を越えて続いているため底は未検出である。

S K03 調査区の中央北寄りの、段差の上面で検出した土坑である。長さ1.1m、幅0.4mの長方形で、深さは約40cmである。出土遺物から江戸時代以降のものである。

S K04 長さ2m以上、幅2.2mの長方形である。深さは約40cmまで掘削したが、影響深度を越えているため底は未検出である。埋土は褐色礫混じり砂で直径8~15cmの円礫を含む。

S X01 長さ12m以上、幅3.6m以上で、調査区を越えてさらに西へ続いている。深さは約20cmまで掘削したが、影響深度を越えているため底は未検出である。埋土は、流水の影響と思われる縦状の堆積構造が観察された。大規模な溝や河道の可能性がある。

第2造構面 鎌倉時代頃と考えられる造構面であるが、調査区の南西半分は造構面が工事影響深度以下に続いているため、造構は検出していない。北東半分で土坑を3基検出した。

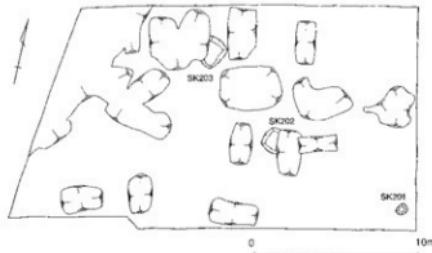


Fig. 134
第2造構面平面図

S K201 長径0.7m、短径0.5m、深さは約30cmの楕円形で、土師器片・須恵器片が出土した。

S K202 直径1.6m、深さは約30cmの不整な円形で、上師器片・須恵器片が出土した。

S K203 直径1.8mの不整な円形であるが、西半は攪乱で破壊されていた。深さは約30cmで、上師器片・須恵器片・土錘片が出土した。

3.まとめ 都家遺跡は扇状地の緩斜面上に立地する遺跡であるが、現在調査地点周辺は宅地化が進行し、地形の旧状が判る部分はほとんど残っていない。今回の調査によって北東から南西へ段状に続く耕作地と、それを造成して拡張した状況が判明した。造構としては江戸時代頃の土坑、室町時代頃のピット、鎌倉時代頃の土坑を確認した。平成3年度には調査地点の西隣で実施した発掘調査で平安時代や古墳時代の造構を検出している。工事影響深度の関係上、今回は確認できなかったが、その時代の造構が存在する可能性が極めて高い。また、弥生土器片の出土から下層には弥生時代の造構が存在する可能性も考えられる。

ぐん げ　しの の つば 20. 郡家遺跡篠之坪地区 第14次調査

1. はじめに

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（郡家遺跡）に含まれ、その隣接地においては数次にわたる既往の発掘調査が行われており、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落跡が確認されている。このことから地内には埋蔵文化財の存在が確実であると判断された。今回、当該地における震災復興に係る共同住宅建設に先立ち、用地内に存在する遺跡の開発工事損壊部分についてのみ、記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

なお、この発掘調査は震災復興調査に該当することから遺跡損壊部分に限って発掘調査を実施した。よって開発事業面積は、 $1,053\text{m}^2$ であるが、発掘調査面積は 770m^2 である。今次調査の範囲に該当しない部分は、将来の開発に際しては発掘調査が必要である。



fig. 135
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要 立地と構造

郡家遺跡は、神戸市東灘区御影町を中心に分布し、古墳時代集落跡をその主たる構成要素とする遺跡である。既往の発掘調査は60回以上を数え、古式土師器を包蔵する旧河道、古墳時代中期初頭のL字形煙道を備える竈付き住居跡、奈良時代の掘立柱建物等が検出されている。

郡家遺跡は、六甲山地から瀬戸内海に注ぐ住吉川及び芦屋川によって沖積された扇状地の中腹から末端に展開し、緩やかながらも複数存在する段丘面上ごとに遺構集中区域を探る様相を示す。扇状地によって形成された平野部は狭小であるが、西に明石海峡を控え、東では摂津平野に接しており、瀬戸内海上から摂津及び河内の両平野へと向かう際の結節点の一つである。特に摂津平野が西に向かって収束する地点にあたることは交通の要衝としての要件を満たしていることに注意を促したい。

郡家遺跡において、昭和54年度実施の大蔵地区的調査で検出された掘立柱建物は、柱の掘形の規模から官司に係る道構と考えられ、その所在する地名（郡家）から摂津国菟原郡の郡衙との推定がなされている。今次調査にも係る篠之坪地区及び城之前地区においては昭和63年度実施の発掘調査以来、弥生時代後期から古墳時代後期までの堅穴住居、溝及び旧河道が検出されており、当該期の集落跡の存在が確認されている。

この郡家遺跡に隣接する地域では、伯母野山遺跡、桜ヶ丘B地点遺跡、赤塚山遺跡及び荒神山遺跡に弥生時代高地性集落が展開し、古墳時代には、西求女塚古墳、処女塚古墳及び東求女塚古墳を代表とする前方後円（方）墳が築造されている。特に、銅鐸14個及び銅戈7個を埋納した桜ヶ丘銅鐸山土地の存在は、その埋納の性格から当該地域を特徴付けるものであろう。

調査区の設定 遺跡が市街地に位置し、調査区付近に遺構掘削に伴う排土置場を確保することが困難なため、便宜的に調査区を1区（東半部）及び2区（西半部）と2分割し、1区から順次発掘調査（反転掘り）をおこなった。

基本層序 調査区内の層序は1層：表土（近・現代）、2層：黄色層（中世）、3層：灰色層（古墳時代）、4層：黒色層（古墳時代及び弥生時代）及び5層：赤褐色層（弥生時代以前）に大別される。このうち、3層及び4層が遺物包含層であり、両層の上面を遺構確認面としている。なお、2層については重機による1層除去後に精査を行ったが、遺構を確認するには至らなかつた。

1区の調査 1区では、堅穴住居3棟、竪穴1棟及び溝1条が東半部に集中して検出された。1号竪穴は5号溝に切られ、2号竪穴住居は3号堅穴住居に切られている。4号竪穴住居は、先述の遺構の確認面（4層上面）より1層上面（3層上面）で確認されている。各遺構の主軸方向は概ね同方向であるが、これは地形に連じて遺構が形成された結果であろう。

検出した遺構の概要是Tab. 1に掲げるとおりである。なお、ピット群も調査をおこなつたが、横列及び掘立柱建物等、建造物としての規格を見出すには至らなかった。

| 名 称 | 規 模 (m) | 平面形 | 火 焚 | 柱 数 | 出 土 遺 物 等 |
|-------------------|--------------|-----|-----|-----|----------------|
| 1号竪穴 (S B 1) | 3.6×1.9×0.2+ | 方形 | ? | ? | 土師器 |
| 2号竪穴住居 (S B 2) | 4.7×4.0×0.3+ | 方形 | 炉 | ? | 弥生土器 |
| 3号竪穴住居 (S B 3) | 4.8×3.5×0.4+ | 長方形 | 炉 | 2 | 弥生土器・砾石 |
| 4号竪穴住居 (S B 4) | 4.4×3.8×0.4+ | 方形 | 龕 | 4 | 土師器・須恵器 |
| 5号溝 (S D 5) | 2.3×8.3×0.7+ | 直線 | — | — | 土師器・須恵器・輪羽口・鉄滓 |

Tab.1 1区検出遺構の概要



fig. 136 遺構平図



fig. 137 調査区全貌



fig. 138 1区 整穴住居 (手前より SB02・03・04)



fig. 139 整穴住居 (手前より SB04・03・02)

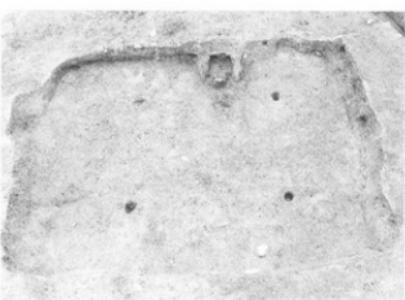


fig. 140 SB04

2区の調査

2区では堅穴造構2棟、土坑2坑及び旧河道2条を検出している。旧河道は各個に2区の東西両端を南流しているが、このうち西側旧河道は25号堅穴に切られている。25号堅穴は26号土坑に切られており、26号土坑も27号堅穴に切られている。さらに、27号堅穴は28号土坑に切られており、旧河道→25号堅穴→26号土坑→27号堅穴→28号土坑の順に変遷する。なお、2区はその範囲のほぼ全体が調査された2条の旧河道以前の旧河道上に位置しており、またに扇状地の堆積の激しさを物語る調査区である。検出した遺構の概要はTab.2に掲げるとおりである。

| 名 称 | 規 模 (m) | 平 面 形 | 火 处 | 柱 数 | 出 土 遺 物 等 |
|----------------|--------------|-------|-----|-----|-----------|
| 25号堅穴住居 (SB25) | 2.9×2.5×0.3+ | 長方形 | ? | ? | 土師器 |
| 26号土坑 (SK26) | 3.1×1.0×0.3+ | 不定形 | — | — | 土師器 |
| 27号堅穴住居 (SB27) | 5.7×4.1×0.2+ | 長方形 | ? | 2 | 土師器・石製模造品 |
| 28号土坑 (SK28) | 1.9×1.4×0.2+ | 隅丸円形 | ? | — | 土師器・須恵器 |

Tab.2 2区検出遺構の概要

3.まとめ

既往の調査により郡家遺跡には弥生時代後期から古墳時代の集落の存在が指摘されていたが、本調査により古墳時代集落における龜導入時期の様相が具体的に判明した。また、鍛冶関連遺物の出土により近辺に鍛冶工房の存在が推察可能となり、同時期の集落構造にも新たな要素を付加した調査であるといえよう。さらに、篠之坪地区第7次調査と同一旧河道（旧河道1）を調査し、この堆積土を3層に分層の上、遺物取り上げをおこなっていることから、弥生時代から古墳時代にかけての土器様式の変遷を理解するに足る資料を得たものと考える。その他、住居跡埋土の水洗いにより検出した石製模造品・玉類の性格付け、及び砥石多量出土の評価の問題等、郡家遺跡における古墳時代集落構造の考察に幾つかの問題を付加した調査である。

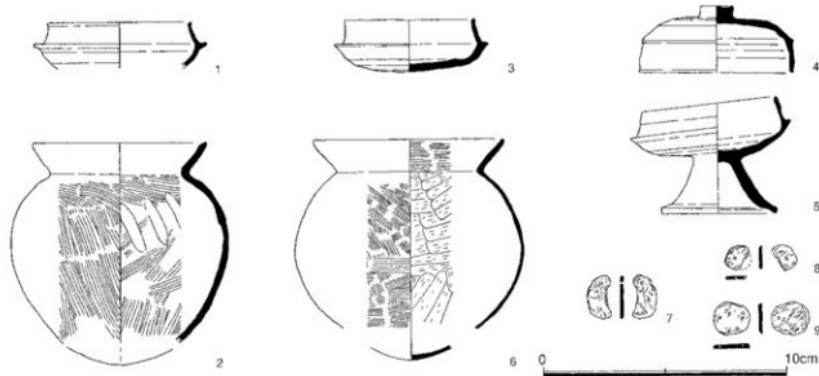


fig. 141 出土遺物実測図 (1・2 : SB04 3～5 : SB05 6 : SB02 7～9 : SK26)

しのはら 21. 篠原遺跡 第15次調査

1. はじめに

篠原遺跡は六甲山系に源を発する楠谷川と六甲川が合流する付近の標高50~80mの扇状地上に位置する縄文時代~中世の複合遺跡である。特に、第2次調査(神戸大学調査)では、縄文時代晩期の遮光器土偶が、また、第12次調査では弥生時代後期の小形 製乳文鏡がそれぞれ出土している。その他の調査においても、縄文時代~弥生時代の住居址が数多く確認されており、同遺跡が当時において大集落を形成していた可能性が高い。

今回の調査は住宅建設に伴うもので、切土される道路・駐車場・階段部分について発掘調査を実施した。



2. 調査の概要

基本層序

調査は便宜上、1~4区の調査区域を区分し進めた。調査地の基本層序 (fig. 144) は上層より現代盛土、旧耕土、淡褐色粘砂土、濃灰茶色粘砂土、暗灰茶色粘砂土、暗褐色粘砂土となっている。淡褐色粘砂土~暗灰茶色粘砂土は、中世の遺物包含層で土師器・須恵器の椀・皿類や、瓦器、白磁の椀類が含まれている。その他、縄釉陶器片も含まれる。

暗褐色粘砂土は弥生時代後期の遺物包含層で、甕、壺、高杯、器台等が出土している。それぞれの層位の上面では遺構が確認されなかった。この下層上面が遺構面で、そのベース層にあたるのが淡茶褐色粘砂土及び濃灰茶色砂質土である。

この土層及び下層の灰褐色粘砂土には、縄文土器や石器が出土している。いずれも細片であり、時期を特定できるものは、すべて後期に比定される。

石器類については、石礫が数点出土した程度であるが、その製作時にできる剥片が多くみられる。材質は大半がサスカイトで、チャートもみられる。

検出遺構 検出された遺構は竪穴住居 (S B01) をはじめ、溝状遺構 (S D01~03他)、ピットなどで、時期の判明したものは、すべて弥生時代後期に比定される。

S B01 1区東端の南側壁面付近で検出された竪穴住居で、北側が擾乱により、また、南側が後世の削平によりごく一部分しか遺存していない。平面形は方形と推定され、一辺約4.9m程度と考えられる。付帯施設については、周壁溝の一部のみが確認された。埋土より甕の体部が出土した。

3.まとめ

今回の調査は、調査区域（調査面積）が僅かだったため、広い範囲にわたって存在する篠原遺跡のごく一部を垣間見たに過ぎない。しかしながら、弥生時代後期の堅穴住居址（SB01）や縄文土器等の遺物が確認されたことは大きな成果であったと言える。特に、縄文土器の出土は、篠原遺跡における縄文時代（縄文時代遺跡）の実態があまり明確ではないが、今後それらを知る上で重要である。また、弥生時代後期の遺構の確認は、同時期における集落の拡がりや様相を検討する上での一助を担うものである。

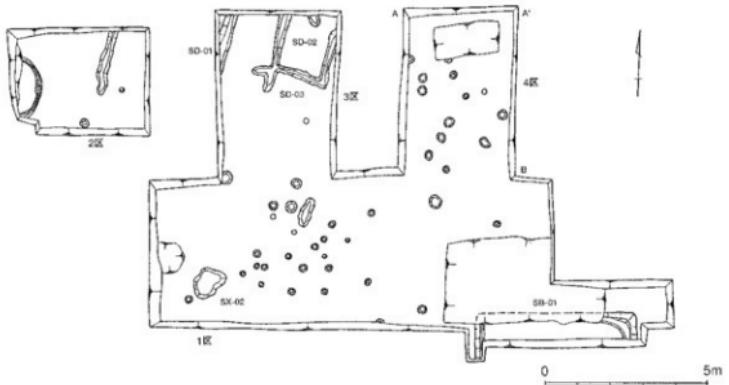


fig. 143 造営平面図

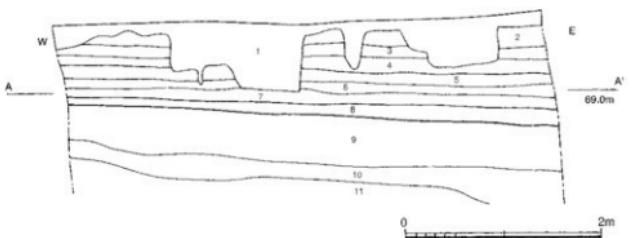


fig. 144 調査区断面図

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1. 現代盛土・擾乱土 | 7. 暗灰茶色粘砂土（中世遺物包含層） |
| 2. 旧耕作土（近世以前） | 8. 黑褐色粘砂土（弥生時代後期遺物包含層） |
| 3. 暗灰色砂質土（旧耕作土・中世以前） | 9. 泥茶褐色粘砂土 |
| 4. 暗茶色砂質土（旧耕作土・中世以前） | 10. 黑褐色粘砂土 |
| 5. 淡褐色粘砂土（中世遺物包含層） | 11. 淡灰褐色粗砂礫まじり粗砂土 |
| 6. 淡灰茶色砂質土（中世遺物包含層） | |

とが 22. 都賀遺跡 第7次調査

1. はじめに

都賀遺跡は、六甲山南麓の都賀川東岸、標高約40m前後の扇状地上に立地している。昭和62年9月に実施した試掘調査で、弥生時代の遺物包含層が確認され、その存在が明らかになった。昭和63年以降、6回にわたる調査の結果、縄文時代早期から江戸時代に至る遺構、遺物が検出されている。

第7次調査にあたる今回は、第3・4次調査北側の市営住宅3号棟・4号棟部分、および第6次調査南側の作業所・店舗・集会所棟の建設地について発掘調査を実施した。

なお、それぞれの調査区を調査順に合わせてⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区と呼称する。

fig. 145
調査地位図
1:2,500



2. 調査の概要

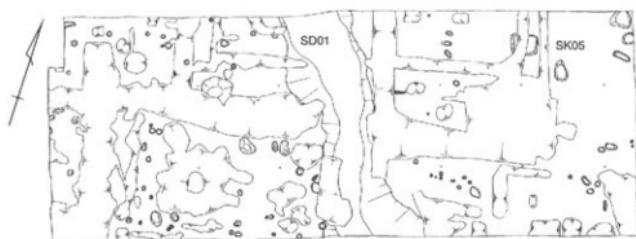
I 区

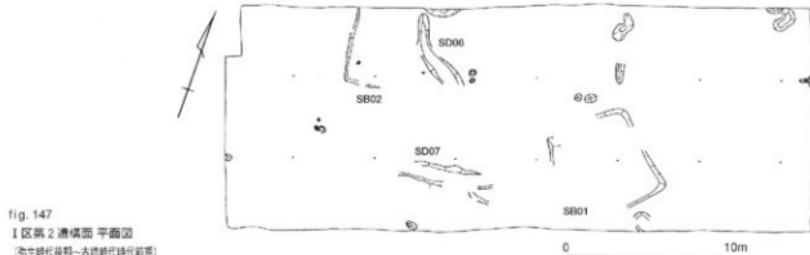
第1遺構面

標高約44.1~44.6mの、暗褐色細砂質土上面で検出した遺構面である。平安時代から室町時代にかけての溝、土坑、ピットなどを検出した。溝SD01は、幅5m、深さ1mの北西から南東方向へ若干蛇行する溝である。埋土の堆積状況から、水が流れていることがうかがわれる。黒色土器や須恵器など、平安時代の遺物が出土した。土坑SK05は、長辺1.5m、短辺1.4m、深さ15cmの長方形で鎌倉時代の土師器、須恵器鉢片などが出土した。

fig. 146

I区第1遺構面 平面図
(平安時代～室町時代)





第2遺構面 標高約44~44.5mの弥生時代遺物包含層である黒色細砂質土上面で検出した遺構面である。堅穴住居が2棟と溝・土坑などを確認した。遺構内および遺物包含層出土の遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと考えられる。

堅穴住居

S B01 調査区の中央南で検出した堅穴住居である。平面は一辺約6mの方形で、深さ約30cmである。主柱は4本柱で、柱穴間の距離は約2m90cmである。東側コーナー付近の一部に、幅約15cm、深さ約5cmの周壁溝が存在する。埋土は黒～黒褐色細砂質土で、下層から土器が比較的多く出土した。また、東半部上層埋下端から、鉄鏃が1点出土した。SB02と同様、出土土器から古墳時代前期と思われる。

S B02 調査区の西北部で検出した堅穴住居である。遺存状況は悪く、西側の一部しか残存していない。北側は調査区外になるため不明であり、西辺で長さ4m70cm分の検出にとどまった。主柱穴と確定できるピットはなかった。西辺側に集中して、南北方向に並んだ状態で炭化材が出土した。黒褐色細砂質土を主体とする埋土より、甕や小型丸底壺などが出土した。出土土器の形態や、須恵器が出土していないことから、古墳時代前期と思われる。

溝 S D06-07 S D06は、幅1m、長さ5m以上、深さ35cmで緩やかに円弧を描く。底面は流水による凸が著しい。土師器・弥生土器・サスカイト片が出土した。S D07は、幅1m、長さ5m以上、深さ25cmの浅いU字形の断面をし、弥生時代後期と思われる土器片が出土した。

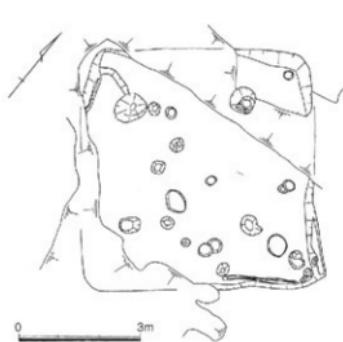
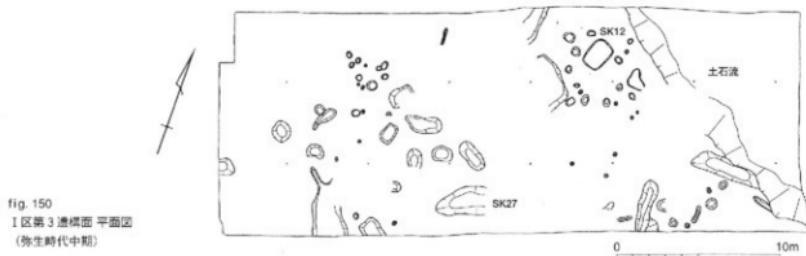


fig. 148 堅穴住居 S B01 平面図



fig. 149 堅穴住居 S B01



第3遺構面 標高約43.8~44.2mの黒褐色砂質土上面で検出された遺構面である。方形周溝墓の一部と思われる溝と土坑、土石流などを確認した。

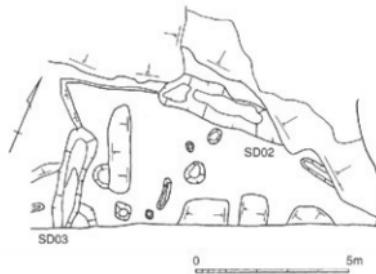
S D02 調査区の南東部で検出した東西方向の溝である。東端は土石流に削られており不明である(方形周溝墓)。幅約1m10cm、長さ4m40cm以上、深さ約70cmで、西端で一段浅くなる。溝の断面はU字形をなす。埋土は黒褐色~黒色細砂質土で、埋土上層から弥生時代中期後半の壺が出土した。方形周溝墓の一部と思われる。

S D03 調査区の南東部で検出した南北方向の溝である。南側は調査区外のため不明であるが、(方形周溝墓)幅約80cm、長さ3m30cm以上、深さ約25cmを測る。埋土は黒色~黒褐色細砂質土である。検出部分のはば中央より、弥生時代中期の壺底部が出土した。溝底のレベルはSD02より10cmほど高い。方形周溝墓の一部と思われる。

S K12・27 調査区の中央北で検出された土坑SK12は、長辺1.9m、短辺1.4m、深さ10cmの長方形で、黒褐色細砂を埋土とする。SK27は、幅1.8m、深さ50cm、断面は幅広いU字形である。北側から落ち込んだ状態で、埋土中層から弥生時代中期の壺が出土した。

土石流 調査区の北東部分で北西から南東にかけての土石流と、西側で南北方向の土石流を検出した。数十cmから1m大の礫が含まれる。北東部分の土石流は、弥生時代中期の遺構(SD02, 03)を切っていることから、弥生時代後期以降のものと考えられる。

第4遺構面 遺構は存在しなかったが、暗褐色砂質土~褐色砂質土から、完形に近い土器を含む縄文時代早期の押型文土器とサヌカイト製石鏃10数点、多くのサヌカイト片が出土した。



II 区

II区は、第6次調査地の南隣地で、IV区はの南側、第1次調査地と第5次調査地との間に位置する。基本土層は、盛土・茶褐色砂質土・黒色細砂質土・黒褐色細砂質土・暗褐色砂質土・淡褐色砂質土（縄文時代遺物包含層）・褐色砂礫土である。

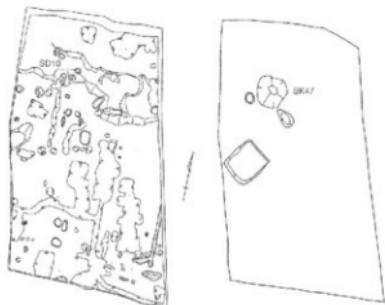
第1遺構面

II区では、標高約43.1~44.4mの茶褐色砂質土上面で検出され、IV区では、標高約41.7~42.8mで検出された。II区出土の遺物から鎌倉時代から室町時代の遺構面と思われる。溝II区で検出された溝S D10は、幅3m、深さ50cm、断面は浅い逆台形を呈した東西方向の溝である。土師器、須恵器、瓦器、陶器が出土している。IV区検出のS D101は、幅25cm、長さ5.3m、深さ10cmの浅い東西方向の溝である。土師器片が出土している。

ピット群

II区の中央北にややまとまりが見受けられるが、建物として確認はできなかった。一部の遺構からは、土師器の小片が出土している。

II区



第1遺構面

第2遺構面

0 10m

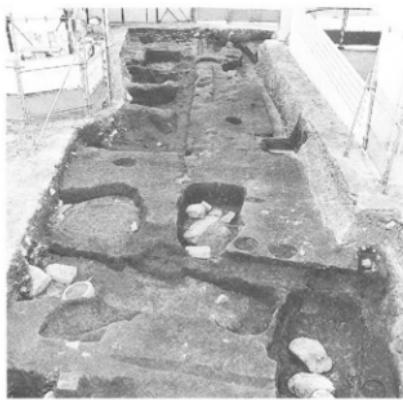


fig. 154 IV区第1遺構面 全景

IV区

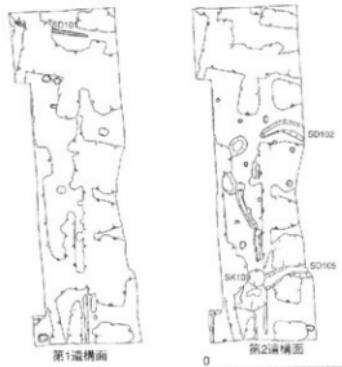


fig. 153 II区・IV区遺構面図



fig. 155 IV区第2遺構面 全景

第2遺構面 II区で標高約43~43.4m、IV区で標高約41.5m~42.5mで検出された弥生時代の遺構面であるが、IV区南端は削平を受け、弥生時代から奈良時代の遺構が同一面で検出された。

S D102 IV区の北半で検出したやや屈曲する溝である。最大幅1.1m、深さ20cm、断面形は浅い逆台形を呈する。溝底より若干浮いて弥生時代中期後半の壺が横になって出土した。

S D105 IV区の南半で検出した。幅約1m、深さ約45cm、断面形はV字状の溝である。溝底より弥生時代中期後半の壺が横位置で、その周囲からは別個体の壺底部や体部片が出土している。溝の形状、上器の出土状況からS D102とともに周溝墓の一部の可能性がある。

土 坑 検出された土坑の概要は以下の表1のとおりである。

| 遺構名 | 検出区 | 規模(m) | 形 状 | 出土遺物 |
|--------|-----|--------------------|-------------|--------------|
| S K43 | II | 長辺2.5・短辺2.2・深さ0.15 | 方形・断面逆台形 | |
| S K44 | II | 径0.65~0.75・深さ0.1 | 楕円形 | 弥生土器片 |
| S K46 | II | 長さ1.5・幅0.9・深さ0.15 | 米粒型・底は平ら | 弥生土器（中期か？） |
| S K47 | II | 直径2・短径1.9・深さ0.4 | 不定形・北東側に段 | 土師器・須恵器 |
| S K109 | IV | 北側が搅乱で規模・形状不明 | 埋土に焼け上がり混ざる | 奈良時代の土師器杯、壺片 |

表1 II区・IV区検出土坑の概要



fig. 156 IV区第2遺構面 SD102



fig. 157 IV区第2遺構面 SD105



fig. 158 SD102 遺物出土状況



fig. 159 SD105 遺物出土状況

第3遺構面 II区では暗褐色土上面では遺構は確認できず、さらに下層の淡褐色砂質土上面で土坑4基、ピット4個を検出した。IV区では暗褐色細砂質土（縄文土器包含層）を基盤として土坑1基とピットを検出した。標高はII区で42.4~43.1m、IV区では41.3~42.4mである。

S K49 II区の中央西端で検出した土坑である。西側は調査区外のため規模は不明である。繩文土器とサヌカイト片が出上している。

S P24 II区の中央で検出したピットである。長径約25cm、短径約20cm、深さ約15cmで、埋土は暗褐色弱粘性砂質土である。

S P25 II区の中央で検出したピットである。直径約25cm、深さ約10cmで、埋土は暗灰褐色砂質土である。

S P26 II区の中央で検出したピットである。直径約30cm、深さ約10cmで、サヌカイト片が出土した。

S K111 IV区中央で検出した。東側は擾乱で失われているが、径1m、深さ50cmの土坑である。埋土は黒褐色細砂を主体とする。遺物は出土していない。

第4遺構面 以下の面では遺構は存在しなかったが、第3遺構面ベース層以下は縄文時代早期の遺物包含層となる。最終掘削面の標高は、約42.2~42.9mである。

II区 遺物包含層からは、押型文土器とサヌカイト製石鏃、多量のサヌカイト片が出土した。他に、チャート片や黒曜石の楕小片も出土している。

IV区 暗褐色細砂質土と淡褐色砂の2層の遺物包含層が存在する。縄文時代早期の押型文土器の他に、サヌカイト製石鏃、サヌカイト片が出土している。

工事影響深度の関係で、一部遺物包含層が残存している。最終掘削深度は、調査区北側2/5については標高約41.6m、調査区南側3/5については標高約41.3mまでである。



fig. 160 II区第3遺構面 全景



fig. 161 IV区第3遺構面 全景

III区

4号棟部分の調査区で、第4次調査地の北側に位置する。南北2/3は後世の削平が著しく、調査区の中央西では、盛土除去後に地山面を検出するなど、遺物包含層がない部分もあった。

西壁南側の観察では、基本土層は盛土・黒褐色粘性砂質土・暗赤褐色粘性砂質土・黒褐色細砂質土・暗褐色砂質土・暗褐色砂礫土・褐色細砂・褐色砂・粗砂である。

第1遺構面

標高約42.9~44mで検出した遺構面である。後世の削平を著しく受けているため、上層の遺構面がない部分もあり、弥生時代から室町時代にかけての遺構が混在する。溝、土坑、ピットなどを検出した。検出された土坑の規模、形状等は表2のとおりである。

S D15 南西部で検出した、長さ4m10cm以上、幅約75cm、深さ35~40cmの東西方向の溝で、北側が一段深くなる。西側は調査区外のため不明である。溝の形状と埋土の堆積状況から、区画を目的とした溝と思われる。弥生土器が出土している。

S D16 北端で検出した。幅約1m50cm、深さ約35cm、断面逆台形の南北方向の溝である。南側は削平されており不明である。埋土上層は暗褐色粗砂質土、下層はにぶい黄橙色砂礫で、一度に堆積した状況である。室町時代と思われる瓦器・白磁・土師器片などが出土した。

| 遺構名 | 規模(m) | 形 状 | 出土遺物 |
|-------|-----------------------|------|-------------------------|
| S K53 | 南北辺2.8m(東西辺搅乱で不明) | 方形 | 須恵器、土師器、元豐通宝(初鑄1078年)1点 |
| S K55 | 調査区外のため不明 | 長方形 | 土師器片と骨片 |
| S K59 | 長辺1.15m・短辺80cm・深さ10cm | 不定方形 | 鎌倉時代と思われる瓦器碗 |
| S K65 | 径50cm | 円形 | 土師器器と瓦器片 |
| S K66 | 短辺50cm(長辺は搅乱で不明) | 楕円形 | 室町時代の土師器小皿が数枚重なって出土 |

表2 III区検出土坑の概要

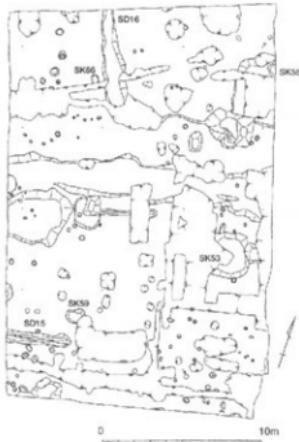


fig. 162 III区第2遺構面 平面図



fig. 163 III区第2遺構面 全景

第2造構面 標高約42.8~43.8mで検出した造構面ある。土坑、ピットなどを確認した。南東隅のピット群は、埋土が黒褐色粘性砂質土である。また中央西の黄褐色砂上のピットは、埋土がやや灰色の黒褐色砂質土である。なおベース層の褐色砂質土から下は遺物は出土しなかった。

S K67 調査区の南半で検出した1m20cm大の不定形土坑である。暗褐色砂質土から縄文時代早期の押型文土器が1点出土した。

3.まとめ 今回の調査では、既調査の結果と同様、縄文時代早期の押型文土器包含層、弥生中期の方形周溝墓、古墳時代前期の竪穴住居、古代・中世の造構などが検出された。Ⅲ区では削平が著しく、縄文時代早期の包含層は検出できなかった。

縄文時代早期の押型文土器は、外面の押型文のタイプと内面の斜行沈線から、高山寺式後半の範疇に入ると考えられる。

サスカイト製石器は十数点出土しているが、うち8点はⅡ区からの出土であり、残りもⅠ区東半とⅣ区から出土している。

Ⅰ区では、方形周溝墓の一部と思われる溝を2条検出した。これらが同一の周溝墓の溝であるならば、これまでの調査と同様、隅が切れる形態の方形周溝墓となる。

また、依然として弥生時代中期の住居は検出されておらず、周溝墓を構築した人々の集落を確認するには至らなかった。

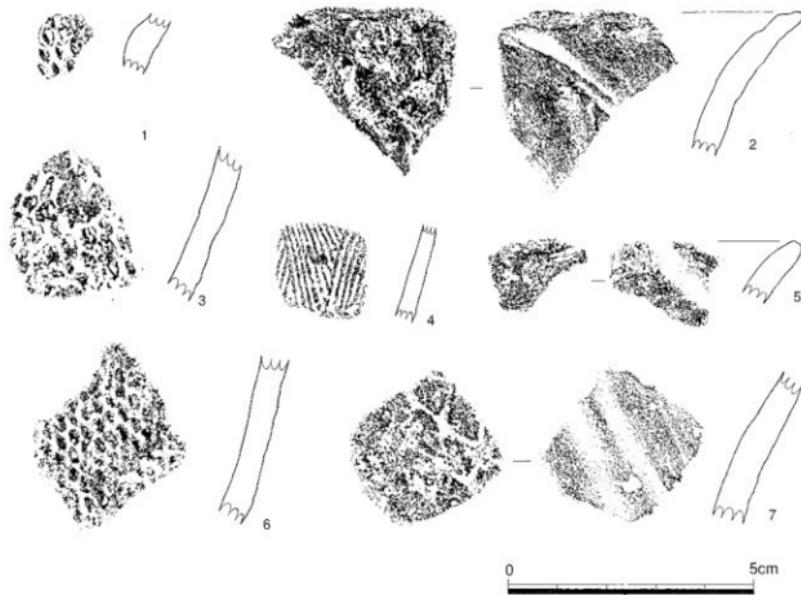


Fig. 164 出土遺物実測図

23. 西郷古酒蔵群（沢の鶴大石蔵）

1. はじめに

沢の鶴大石蔵は日本一の酒処として有名な灘五郷のうち、都賀川の河口付近一帯にひろがる「西郷」と呼ばれる地域に位置している。大石蔵の東約50mには都賀川が、南約100mには藏築造当時の海岸線があり、標高約3.5mの、河口近くの砂浜上に立地している。古い酒蔵が近代的な醸造工場に次々に作り替えられていった中、大石蔵は「沢の鶴資料館」の名称で、昔ながらの酒蔵や酒造りの方法を学習できる場として、昭和53年11月3日以来一般に公開されてきた。また昭和55年3月25日付で兵庫県指定有形民俗文化財に酒蔵用具一式とともに指定され、失われていく古い酒造りの資料を現代に伝えていた。しかし先の大震災によって資料館は全壊し、貴重な酒造りの資料に多大の被害を被った。

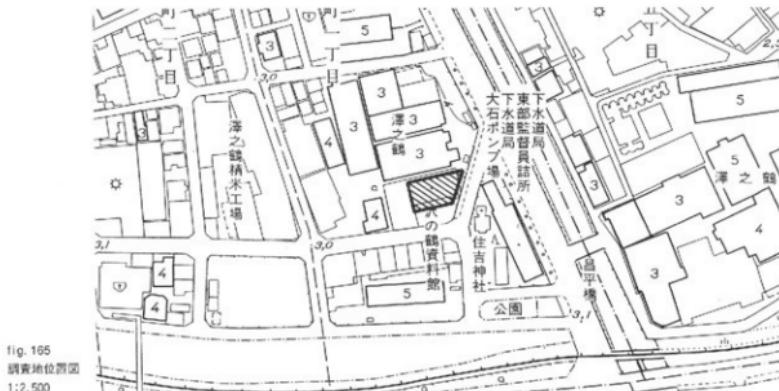


fig. 165
調査地位置図
1:2,500

今回の調査は資料館を再建するにあたり、資料館以前の酒蔵の構造と、藏築造以前の状態を解明することを目的とした。現在大石蔵の配置図等の資料がないため、建物の変遷には特に留意して調査を実施した。

実際は別の酒蔵を2棟繋げて現在の姿にしており、築造当時はそれぞれ別の蔵名で呼称されたと思われる。

蔵の機能上の名称としての「前蔵」「大蔵」とはそぐわないが資料館であった関係上位置関係が分かるよう、調査に当たっては使用されていた「前蔵・大蔵」の名称をそのまま踏襲した。

また、大蔵南端の増築部分は「大蔵南」と呼称した。以下、調査した各建物・遺構にそって記述していく。

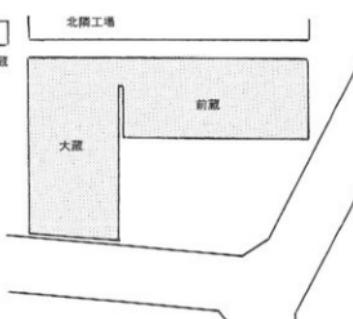


fig. 166 昭和50年頃の建物配置と調査区 (トーン)

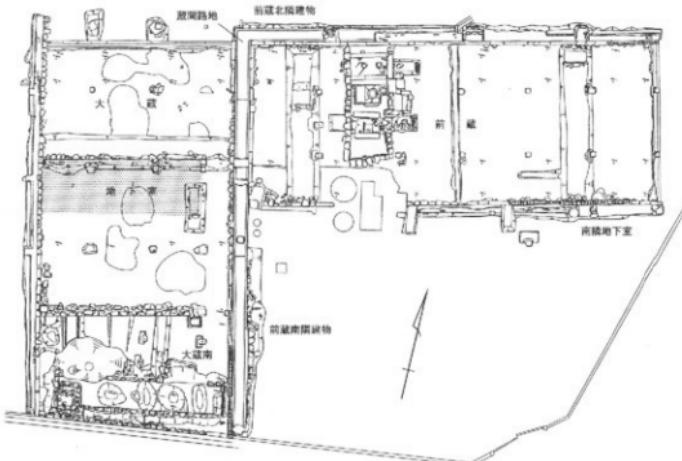


fig. 167
横浜区平面図
1:300

2. 調査の概要

前　　蔵

資料館東半の東西方向の礎石建物である。外周は壁で、内部は柱で上部の荷重を支えている。柱間は桁行6間×梁間3間であるが、築造当初は東方へさらに1間あるいは2間延びており、昭和50年頃敷地が現在の形状になった時、今の位置に切り縮められた。相前後して倉庫として使用するために大蔵に渡れる通路が造られた。また資料館として整備された時、本来なかった米洗場と蒸米を作る釜場が南西部に、廟が南外側に取り付けられた。床面は資料館として整備された時、倉庫として使用された時のアスファルトを除くと4面確認できた。蔵以前は島で、耕作土の畝上に浜砂を盛って蔵を築造していた。

第1床面

大石蔵で最後まで醸造していた面である。蔵の全域に約15cmの厚さで真砂土と石灰の二和土を敷いている。二和土を敷いた時期は特定できなかったが、第2床面との関係から昭和30年頃と思われる。沢の堀株式会社の話では、昭和49年3月まで醸造していたという。第2床面第3床面の槽場を埋め立てた以降の面である。蔵のほぼ中央に、南北方向の溝を掘り、溝以西槽場以東は淡黄色土を貼っている。同時に壁を造り、礎石を上下逆転させている。礎石が逆転した状態であったことから、蔵の上部構造は少なくとも一部は解体されていたと考えられる。槽場を埋め立てた時期から昭和20年頃以降と思われる。

第3床面

第4床面の蔵が改築された時の面である。蔵周囲の石垣の上部を積み直し、同時に礎石とその根石を掘り込んで据え、その後蔵の全域に暗黄色粘質土を敷いている。礎石は花崗岩の切り石で、上面に「六十二」から「七拾壹」までの漢数字が墨書きされていた。蔵1棟で70数個もの礎石は使用しないため、同時に数棟の蔵が築造されその通し番号の可能性がある。中央西寄りに半地下室の槽場と、蔵の南隣に蔵の石垣をそのまま北側の石積みとした地下室がある。槽場築造時の仮設石垣前面から明治17年の一銭銅貨の出土や、積直した石垣の掘形上を昭和13年の阪神大水害の洪水層が覆っていること、槽場が埋め立てられたのは太平洋戦争時の酒造統制によると考えられること、想定する一銭銅貨の流通期間にもよるが、明治時代後半頃に改築され、昭和20年頃に使われなくなったと考えられる。



Fig. 168 前戸蔵場平面図

構場

蔵の中央西寄りで検出した、醸酵の進行した醪を加圧して液体の酒と酒粕とに分離する酒押りの構造である。長さ7m、幅2.4m、深さ1mの石積みの半地下室で、東側の中央には内部へ降りる階段が3段分ある。床面で醪の容器になる「酒槽」を据えるための基礎構造を2基、押し出た酒を受ける「垂壺」を2基、酒槽に圧力をかける棒の支点となる「男柱」を1基検出した。また槽場の西隣でジャッキのワイヤーを巻き取る「回転棒」の礎石を1基、東隣で男柱設置時の仮設の石垣を2面検出した。垂壺の大きさから、一連の酒押り工程の中で南側の基礎構造、垂壺、男柱、仮設の石垣、礎石は「揚槽」の工程に、北側の基礎構造、垂壺、仮設の石垣は「貯槽」の工程に相当すると考えられる。

掲槽の基礎構造は、長さ約160cm、幅約30cm、厚さ約20cmの花崗岩の切石を、1mの間隔で並行に置いている。垂壺南側にある酒槽を据える段と南側の石積みとの間隔は3.1mで、それ以上大きな酒槽は据えられない。垂壺は高さ約100cm、最大径約70cm、2石入りの備前焼の大甕である。外面には「太 宗右衛門」の線刻と、ひび割れを修繕した跡が3ヶ所ある。プロポーションから慶長年間頃の作と思われるが、かなりの年月を何度も補修して使われていたことになる。現在垂壺の周囲にモルタルが塗られているが、断割りの結果埋設当初は二和土が貼られ、その上部を修繕したものと判明した。

男柱は一辺約30cmの角柱で、掲槽の基礎石材より約20cm上方までしか残っていない。加圧方式がジャッキに変化した時点で切断されたと考えられる。柱残存長は不明であるが、加圧時に男柱自体がね上がるのを防ぐ横木の深さから約100cmと推定できる。さらに横木の上には唐臼の杵の支点になる石材が東西数個ずつ重石として置かれていた。横木の大きさは約15cmで、間隔を約10cmあけて2本並べて埋設していた。間隔から男柱の下部を削り込み、両側から挟み付けるような状態で男柱と固定されたと思われる。東隣で確認した仮設の石垣は、男柱や重石を設置する際、軟弱な地盤を掘り込む必要性から構築したものと考えられる。石材は不揃いな大きさの花崗岩で、あまり丁寧には積まれていない。石垣前面は、一度に埋められており、土中から明治17年の一銭銅貨が出土した。



fig. 169 前蔵槽場



fig. 170 前蔵地下室

貢槽の基礎構造は、長さ約220cm、幅約25cm、厚さ約35cmのコンクリートを1.1m離して打ち、床面はモルタルを貼っている。しかし断割りの結果、下部が大きく掘り込まれていたことが判明し、東隣で揚槽同様の仮設の石垣を確認していたことから、構築当初は男柱を備えていたが、後に掘り抜かれてコンクリートで再構築したと考えられる。加圧方式は近くに回転棒の礎石がないこと、床面のモルタル上に一辺約40cmの隅丸方形の機械の支柱を受けていたと思われる窪みがあることから、男柱から水圧を利用したものに変化したと考えられる。垂壺北側にある酒槽を据える段と北側の石積みとの間隔は2.4mで、それ以上大きな酒槽は据えられない。垂壺は高さ約50cm、最大径約50cm、3斗入りの石見焼と思われる甕である。この垂壺は槽場構築当初ではなく、揚槽の垂壺で兼用していたが、基礎構造を再構築した時に新たに埋設されたものである。したがって据えた酒槽の正面に垂壺が位置しないが、「よだれかけ」と呼ばれる掉り出た酒を垂壺に導く用具の取り付けを工夫すればこの問題は解決するものと思われる。甕の時期は明確ではないが、底面に押されているゴム印の文字が右書きになっているため、概ね昭和の初め頃と思われる。

地下室 蔵の南側石垣をそのまま北側の石積みとした地下室である。床面にはモルタルを貼っていた。石材は花崗岩であるが、東側の石積みに竜山石の長直方体の切石が1石縦方向にはめ込まれていた。今回の調査では実際に使用されていた釜場は確認できていないが、この地下室は燃料置き場と考えられ、釜場も近くに存在した可能性が高い。

第4床面 前蔵が築造された時の面である。床面の遺存状態は非常に悪く、蔵の東半は第3床面の改築時に削平されている。西半にのみ約10cm暗茶色粘質土を敷く状況が確認できたが、そこは前述の槽場が構築されている。蔵の北西角には清酒を一夏貯蔵する夏廻いの可能性がある石積みの地下室が、中央南寄りには醸造作業中に暖をとったと思われる炉がある。蔵の周囲は石垣を積んでいるが、礎石の状況や壁の構造など不明な点が多い。明治16年頃に若井家が当地で酒蔵を営んでいたが、その時初めて蔵を築造したのか、前身になる蔵があり、それを改築したのかは不明である。震災で倒壊した資料館を整理している時、天保十年銘の墨書きを持つ柱材が発見されていることから、現時点では江戸時代後半から明治時代頃と、幾分広くとらえておきたい。

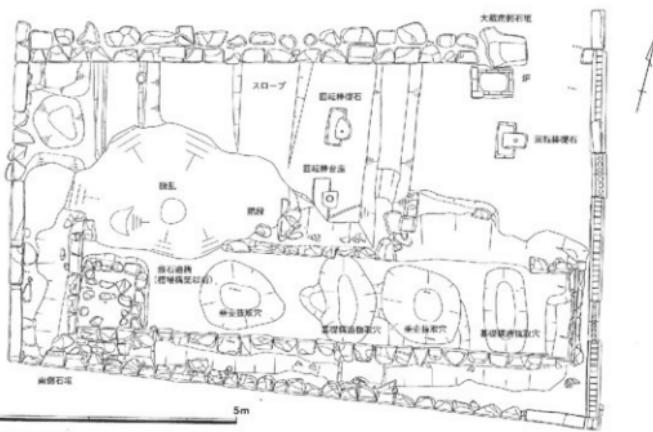


fig. 171 大蔵南槽場平面図

大蔵 資料館西半の、南北方向の礎石建物である。前蔵同様外周は壁で、内部は柱で上部の荷重を支えている。柱間は桁行4間×梁間4間であるが、築造当時は北方へさらに延びていた。昭和50年頃北側に隣接するバック詰工場が建てられた時、現在の位置に切り縮められた。床面は2面確認でき、蔵以前は前蔵同様畠で、上に浜砂を盛っていた。

第1床面 昭和49年3月まで醸造していた面である。前蔵同様に蔵の全域に約15cmの厚さで真砂土と石灰の二和土を敷き、その上面には数ヶ所熱を受けて赤変した部分があった。

第2床面 大蔵が築造された時の面である。床面には部分的に淡灰黄色粘質土を貼っていたが、ほとんど畠上の盛砂のままである。蔵の周囲には4段の石垣を積み、礎石を据え、中央に石積みの地下室を造っている。蔵の東端には前蔵との間の露地に排水するよう、瓦製の上管が埋設されていた。石垣の構築方法や石材加工度、礎石が前蔵と共にすることから、前蔵の第3床面と同じ明治時代後半頃以降の築造で、昭和20年頃まで使っていたと思われる。



fig. 172 大蔵 全景



fig. 173 大蔵槽場

| | |
|------|---|
| 大蔵南 | 大蔵南端の増築部分であるが、確認した床面数や大蔵に取り込まれた経過が判明したため、ここでは大蔵と区別して取り扱った。大蔵の築造と同時に石垣で周囲を区画され、床面は資料館あるいは倉庫のアスファルトを除くと3面確認できた。蔵以前は他と同様に畠で、上に浜砂を盛っていた。 |
| 第1床面 | 昭和49年3月まで醸造していた面である。全域に真砂土と石灰の二和土を敷く。この二和土を敷いた時、大蔵南端の石垣が埋め立てられ、大蔵床面との段差が解消していた。 |
| 第2床面 | 後述する第3床面の槽場を埋め立てた以降の面である。約10cmの厚さで全域に暗黄色粘土を貼っている。槽場を埋め立てた部分は、粘土を貼った後に土が締まった分窪んでいた。その窪みに筵を1枚敷いていた。床面の南端には赤色の顔料が散布されていた。前蔵同様に槽場を埋め立てていることから昭和20年頃以降と思われる。 |
| 第3床面 | 大蔵の増築部分として取り込まれた時の面である。全域に約20cmの厚さで暗褐色粘質土の整地土を敷いた後、約10cmの厚さで黄褐色粘質土を貼っている。礎石を新たに据え、槽場を構築している。この時大蔵南端の石垣上にも竜山石（角柱上部に柱座を削り出したもの）の礎石を据えているが、セメントで石垣に固定している。他には大蔵南端の石垣に接して、床面のスロープと槽場で酒を掉る際、暖をとるためにものと考えられるレンガ組の炉がある。時期的には大蔵築造の次の段階になるが、詳細は不明である。 |
| 槽場 | 南端で検出した酒掉りの遺構である。長さ10.1m、幅1.9m、深さ1.2mの石積みの半地下室である。この部分には内部に降りる階段があったと思われ、わずかに階段東側面と思われる石材が1石遺存していた。当初の石材は一辺約30~50cm、高さ約30~40cmの加工程度の低い花崗岩で、段数は最高2段分が残っていた。床面で酒槽の基礎構造の抜き取り穴と垂壺の抜き取り穴をそれぞれ2基ずつ検出した。また槽場の北隣でジャッキのワイヤーを巻き取る回転棒の礎石を2基、回転棒の木製台座を1基検出した。 |
| スロープ | 揚槽、貯槽がどちらに相当するのか不明であるが、加圧方式はどちらもジャッキを使用したものである。具体的な酒槽の基礎構造や垂壺の埋設方法も不明であるが、抜き取り穴の深さから垂壺の器高はともに約60cmと推定できる。回転棒の礎石は東側が長さ35cm、幅50cm、高さ25cm、西側が長さ60cm、幅50cm、高さ40cmで、中心に回転棒の軸を受ける直径と深さ5cmの穴がある。木製の台座は長さ45cm、幅40cm、高さ35cmで、中心に内径12cmの金属の輪がはめ込まれている。 |
| 床面以前 | 槽場が機能していた時、大蔵南端石垣は上部約10cmが出ていたことになる。槽場で掉った酒を搬出する際、石垣上端に足をとられて酒をこぼさないよう、黄褐色粘質土の貼り土を意識的に厚く貼っている。長さと幅約1.5m、高さ約10cmで、石垣上端の段差をなくしている。槽場の階段を想定している位置に向かって傾斜している。 |

前蔵北隣建物 前蔵の北隣で別の酒蔵と考えられる建物の石垣を検出した。部分的に石垣を確認したのみで、正確な建物規模は不明である。前蔵築造時に同時に構築されたと考えられるが、石垣の基底部は前蔵と比較して約20cm高い。石垣の西端は前蔵の西端よりもさらに延びていた。しかしながら大蔵が前蔵に統合して築造された時、この石垣は大蔵の西側の石垣と礎石を構築するために崩されていた。石垣は現代の整地で上部が破壊されており、蔵が解体された時期は戦争中の酒造統制の頃と想定しているため、大蔵築造時に蔵を改築して西端の位置を変更したと考えられる。

前蔵南隣建物 前蔵の南側、大蔵南の東隣で建物の石垣を検出した。建物西側の石垣を確認したのみで正確な建物規模は不明である。資料館として米洗場を復元した時、前蔵の石垣との接続部分が解体されるなど遺存状態が悪いため、築造された時期を推定する根拠が乏しいが、前蔵が改築、大蔵が築造され、大石蔵の様相が大規模に変化した時期を考えておきたい。解体された時期は酒造統制の頃と想定している。今回の調査では酒蔵には本来作るはずの井戸が確認されていない。この建物は井戸の覆屋可能性が考えられる。建物の石垣は井戸の覆屋にしては大き過ぎ、また前蔵南隣の地下室が燃料置き場の可能性があることから、井戸の近くにある筈で、同じく確認できていないこの蔵本米の釜屋もここにあったと想定できる。なお今見られる井戸とはね釣瓶は、資料館として整備した時に上部構造のみ復元したものである。

蔵間露地 前蔵と大蔵、前蔵と前蔵北隣建物との間は通路状になっていた。この部分は時には通路として、時には排水路として使用されていたようである。当初舗装はされてなかったが、昭和13年の大水害の砂層が約10cm堆積した上にモルタルで舗装している。露地の中央をわずかに壅ませ、両側の石垣の部分は蒲鉾状に盛り上げている。その上には酒造統制の頃に解体されたレンガ造りの壁材の断片を埋めている。

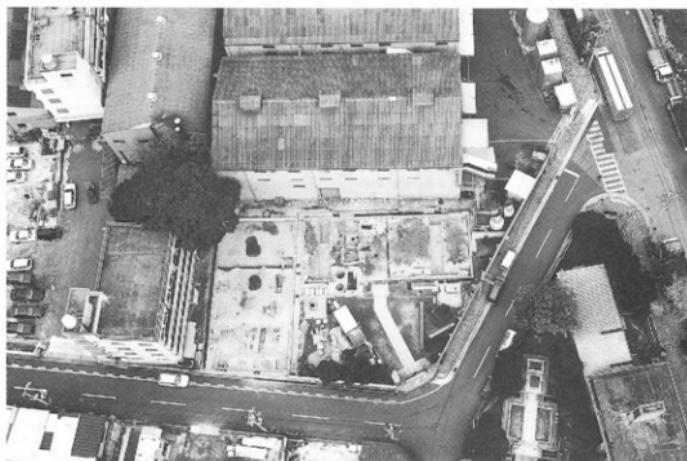


fig. 174 沢の大石蔵 全景（南上空から）

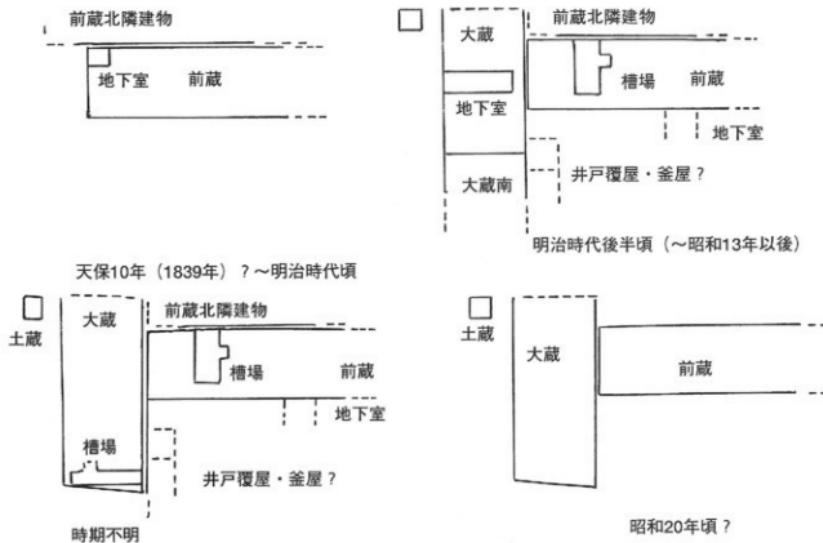


fig. 175 建物変遷図

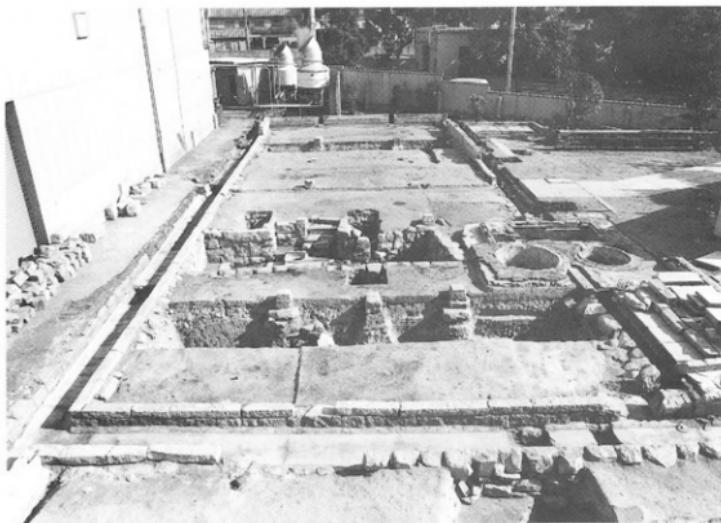


fig. 176 前蔵全景

| 年代 | 前 蔵 | 大 蔵 | 大 蔵 南 | その他・備考等 |
|---------------------------|--|--|--|--|
| ? | 砂浜 | 砂浜 | 砂浜 | 砂浜 |
| 江戸時代 | 島 | | 島 | |
| 天保10年(1889) ? ～明治時代頃 | 蔵築造(第4床面) 盛砂 地下室(夏開い?) 右近(現存下半部) 北石垣前に小石材の石垣 貼床(西半にのみ遺存) 粘土貼り炉 壁体構造不明 礎石構造不明 | | | 前蔵北隣に蔵 墨書きは補修時?(天保 10年) |
| (1) 明治時代後半頃 (～昭和13年以前) | 蔵改築(第3床面) 石垣積直(現存上半部) 貼床 横場(レンガ併用) 側前垂壇(移設) 揚槽貯槽共に男柱 レンガ造壁体 礎石掘直し 礎石上面墨打線と墨書 南面に地下室 | 蔵築造(第2床面) 地下室(夏開い?) 右近 極めて薄く貼床 レンガ造壁体? 上管理設 礎石上面に墨打線 | 石垣による区画 盛砂・整地 | 大蔵南は区画のみ 前蔵北隣改築 (火災?) 大蔵西側に土蔵 前蔵南側に井戸覆屋? 井戸覆屋南側に金庫? 阪神人水壹以前 溝之鎌牌造場全景は昭 和10年頃 |
| (2) ? | 蔵改修 横場改修 揚槽ジャッキ式化 横場右垣・湧積直し | 蔵改修 地下室埋立 礎石掘直し (セメント使用) | 大蔵増築(第3床面) 貼床 横場(貼床等なし) 揚槽・貯槽共ジャッ キ式 大蔵からのスロープ レンガ造壁体? レンガ造炉 南右近現在の位置に 構築 | 大蔵南を大蔵に取込む 蔵間露地にモルタル舗 装 (石垣横盛上化粧) (阪神人水壹以後) |
| ? 昭和20年頃? | 蔵改修 横場周囲床貼直し 横場改修(モルタル) 右見焼?垂壇(新設) 貢横水圧式化 (3) 横場右垣・部積直し | 蔵改修 横場石垣上部積直し 礎石改修 (コンクリート使用) 礎石側面に墨打線 | 蔵改修 横場石垣上部積直し 礎石改修 (コンクリート使用) 礎石側面に墨打線 | 両蔵間露地にモルタル (旧壁体原立) 井戸覆屋・金庫解体 前蔵北隣建物解体 大蔵中の統制 |
| (4) 昭和30年頃? | 蔵改修(第2床面) 横場埋立(旧壁体埋立) 西半床貼直し(区画溝) 礎石二軒転倒 レンガ造モルタル塗壁 体 | 蔵改修 レンガ造モルタル塗壁 体 | 蔵改修(第2床面) 横場墨矢(旧壁体埋立) 床貼直し 垂壇・酒槽基礎抜取 レンガ造モルタル塗 壁体延 赤色顔料散布 | 昭和49年3月まで醸造 |
| 昭和50年頃 | 蔵改修(倉庫) 全面アスファルト敷 | 蔵改修(第1床面) 全面床貼直し(二和土) | 蔵改修(第1床面) 全面床貼直し(二和土) | 両蔵間の通路築造 |
| 昭和53年頃 | 蔵改修(資料館) 東1(2?)間分切断 東壁体コンクリート造 更に全面アスファルト 舗子用礎石二石設置 | 蔵改修(資料館) 北1(?)間分切断 北壁体コンクリート造 | 蔵改修(資料館) | 東側市道拡幅 北隣にパック詰工場建 設 昭和53年11月3日 資料 館開館 |

表1 沢の鶴大石蔵建築物等変遷一覧表

注1 各種の項目のうち、ゴシック体は建物等の変化を、その下で1字下げる項目はその建物等の内容を、下線付きの項目は年代推定の根拠となる重要事項を表している。

2 左端欄の1～5は、本文および建物等変遷図の1～5に対応する。

3. まとめ

これまで各建物ごとに記述してきた内容をまとめると、変遷一覧表や変遷図のようになる。もう一度概観すると、大石蔵で確認された最も古い建物は、前蔵と前蔵北隣の蔵で、明治時代頃には建てられていたようである。そして明治時代後半頃に大蔵が建てられ、前蔵と前蔵北隣の蔵が改築された。その後大蔵南が大蔵の増築部分として取り込まれた。昭和20年頃には両蔵の槽場が埋め立てられ、前蔵北隣の蔵や前蔵南隣の建物が解体された。昭和49年3月までは醸造を続けていたが、昭和50年頃に現在の敷地の姿になるとともに北隣にバック詰工場が建てられ、前蔵の東壁と大蔵の北壁が移設された。また倉庫として使用するため両蔵間に通路が設置され、概ね倒壊した資料館の姿になっていた。

天保十年銘の墨書きであるが、柱を補修した時の補修材を接ぎ合わせた面に書かれていたため、震災時まで発見されないでいた。ただ資料館の収蔵資料を慌ただしく取り出していた時の発見であるため、大石蔵のどの部分にあった柱材か不明であることが残念である。棟札ではないので改築造時の年代を示すものではなく、また昭和50年まで何回も蔵の改築や改修が行われているため、その時に別の蔵の廃材を古材として転用した可能性も考えられる。したがって直ちに建造された年代として決めることはできないが、天保十年に建造された可能性を有する資料であるといえよう。

「銘酒澤之鶴齶造場全景」は沢の鶴株式会社の自社宣伝用の絵である。所有する敷地をすべて画面上に収めるため、敷地配置に若干のデフォルメを施している。建物配置がどれほど信頼できるか定かではないが、都賀川右岸の道路の配置が、昭和10年6月30日大日本帝国陸地測量部発行の假製地図「御影」の道路配置と似ているため、そのころの状況を描いたものと思われる。大石蔵は画面の左端で、敷地はまだ画面外に続いている。ここには前蔵と思われる建物は描かれているが、大蔵は画面の境界になるためか描かれていない。酒蔵の発掘調査は神戸市内では2例目であるが、灘では初めての例である。県下では伊丹市内で約20例あるが、灘と伊丹という酒處を持つ兵庫県ならではの事例で、酒蔵の調査事例自体、全国でもあまり実施されたとは聞き及ばない。したがって今回確認した平地下の石積みの槽場が、石材の豊富な灘地域の特色であるのか、あるいは時代的な特色であるのか、現時点では判断できない。ただ伊丹から灘に酒造の中心地が移り、精米技術の進歩とともに蔵1棟当たりの生産量が増加すると、必然的に搾る醪の量は増加しよう。酒搾り工程は蔵入総出で行う作業で、酒槽に醪を積み上げたり、酒槽に荷重をかける棒に重石となる石材をかける作業は、床面が少しでも低いほうが作業がしやすいと思われる。このことは今後神戸市内の酒蔵の調査例が増加するにつれ、明らかになっていくであろう。

酒槽 자체は遊び出されていたが、今回の槽場では酒槽を置いていた位置が特定できるほか、垂木、男柱、ジャッキを回す回転棒の礎石が残っており、酒搾りの状況を復元することが可能である。また加圧方式が男柱からジャッキ、あるいは水圧に変化した過程が判明した非常に良好な資料である。酒搾り工程は多くの人手と手間と時間がかかる作業で、それ故に現在の酒蔵では機械化・自動化が進行し、従来の酒搾りの方法が残るものはなくなっていることが多い。今回の事例は明治時代後半頃以降のものではあるが、今ある酒蔵ではほとんど見ることができないことを考えると、日本の酒造史上、また神戸の近代史上、大変貴重なものである。

24. 西求女塚古墳 第8次調査

1. はじめに

西求女塚古墳は六甲山麓に形成された扇状地の末端部に位置する3世紀末～4世紀初頭に築造されたと考えられている前方部を東に向かって前方後方墳である。古墳本体とその周辺は、過去に7回にわたって調査が行われ、古墳の埋葬施設（石室の主室）より三角縁神獣鏡7面を含む12面の船載鏡が出土している。また、周辺調査では、第6次調査において同古墳の周溝の一部と考えられる落ち込みや『敏馬の泊』に関連すると考えられている奈良～平安時代の遺構などが確認されている。

今回の調査は集合住宅建設に伴うもので、古墳の西隣にあたり、弥生時代～近世の遺物などが確認された。



2. 調査の概要

1～3区の調査区を設定し、調査を進めた。1・3区は全面調査、2区はトレンチによる調査を行った。2区については、洪水砂層及び河道状堆積層しか確認できず、遺構面になりうる層位面が存在しなかった。1・3区では第6次調査の第2遺構面（古墳の周溝及び奈良～平安時代の遺構の確認面）に対応する遺構面が確認されたが、搅乱が多く、面が残存する部分でも遺構は検出されなかった。遺構面までは現地表面から浅く、約30～80cm程度の掘削で検出される。

遺構面までの層序は、現代整地層（現代盛土層）、旧耕土層、整地層の順で、一部で旧耕土層・整地層の下層に遺物包含層が確認された。この遺物包含層については、中世以前の遺物しか確認されなかったが、それより上層は近世以降の遺物を包含する。

遺物は現代の整地層、旧耕土層、整地層、遺物包含層及び擾乱内より若干出土しているが、量的には少ない。これらの遺物は、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代、平安時代、中世、近世のものが含まれるが、中世～近世のものが大半である。

遺構面より下層の層位は、扇状地が形成されるときに堆積したと考えられるボルダー層や砂礫、あるいは洪水砂、シルト層、泥湿地状堆積層などが互層となって存在し、地勢が安定しておらず、遺構面になりうる層位面は確認されなかった。

3.まとめ

今回の調査のポイントは、西求女塚古墳の周辺の確認と、奈良～平安時代に当地域に存在し、明石海峡の風待ち港であった『敏馬の泊』に伴う遺構の確認であったが、結果として、調査区域内では検出されなかった。しかしながら、後世の旧耕土層・整地層中ではあるが、奈良～平安時代、あるいは古墳時代後期、弥生時代後期といった時期の遺物を確認しており、近接地域においてそれぞれの時期の集落の存在を肯定できるものであり、今後の周辺調査によって、それらが確認されることが十分に考えられる。

周辺については、第6次調査における検出状況から、今回の調査地と古墳の墳丘との間に存在する可能性が極めて高く、今後、西求女塚古墳の規模・付帯施設などを細かく検討、解明していく上で、留意しておくべきであろう。



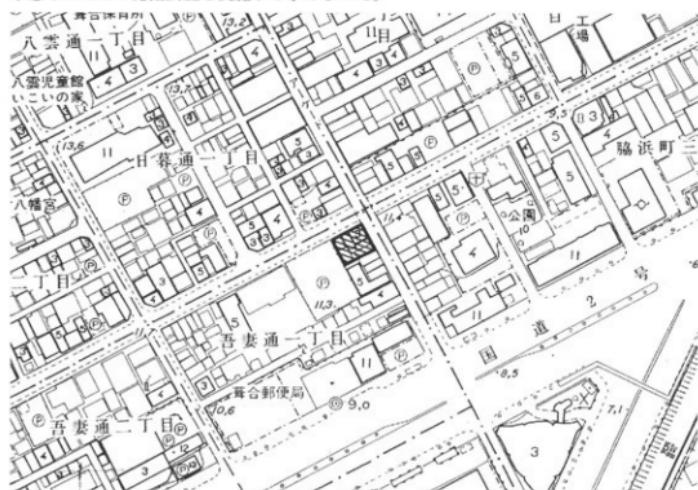
fig. 178 調査地遠景

ひぐれ 25. 日暮遺跡 第13次調査

1. はじめに

日暮遺跡は生田川の東方約750mの沖積地上に位置し、これまでの調査では古墳時代から古代にかけての遺構が顕著に見られている。平成7年度の第11次調査では古代の大型掘立柱建物が検出されている。今回の調査地は第11次調査地点に春日野道商店街アーケードを挟んで西側に接しており、店舗兼集合住宅の建設計画により遺跡の一部が影響を受けると予想されたため発掘調査を実施する事となった。

fig. 179
調査地位図
1:2,500



2. 調査の概要

調査地が現在市街地となっており、旧地形の復原が難しい。調査の結果、戦災の焼土面の直下に近世と思われる黄褐色の耕作土が確認でき、その20~30cm下層の花崗岩の礫を多く含んだ黒褐色の粘質土の層を確認することができた。

黒褐色土の下層40~50cmには、花崗岩の礫を多く含んだ灰褐色の砂質土の層が確認できている。

遺構の検出を黄褐色土および黒褐色土の上面で行った後に下層確認のトレンチを入れたが、下層では遺構・遺物とともに検出できなかった。

第1遺構面　調査区を南北に走る近世以降の築溝十数本と石積みの井戸等を検出することができた。

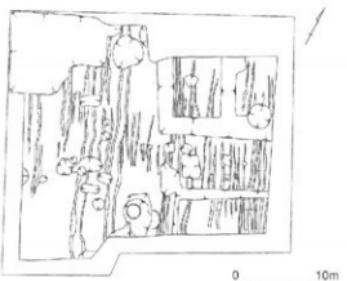
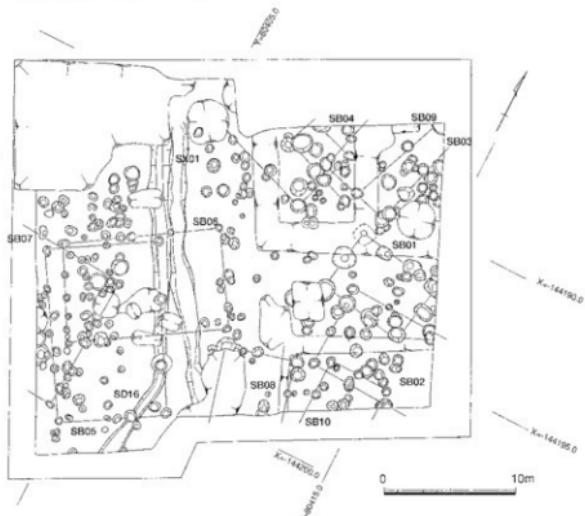


fig. 180 第1遺構面平面図

第2遺構面 花崗岩の礫を多く含む黒褐色土の上面で検出できた遺構面である。時期不明の掘立柱建物9棟以上、ピット群および時期不明の溝状遺構と古墳時代の溝状遺構が各1条ずつ検出できた。掘立柱建物9棟は第11次調査の結果を考えると、奈良から平安の時期にかけてのものである可能性が高いと思われる。

fig. 181
第2遺構面平面図



- S B01 南北2間、東西3間の側柱の掘立柱建物である。柱間は約1.1m~1.2mで柱穴に確實に伴うと思われる遺物の出土は見られなかった。
- S B02 南北2間、東西2間以上の側柱の掘立柱建物である。柱間は1.5m~1.6mをはかる。遺構に伴う遺物は出土しなかった。
- S B03 東西2間、南北2間以上の側柱の掘立柱建物である。柱間は1.4m~1.5m、南北は約1.3mである。遺構に伴うと思われる遺物は出土していない。
- S B04 東西2間、南北2間以上の側柱の掘立柱建物である。柱間は東西1.5m、南北約1.8mである。遺構の時期を決定するような遺物は出土していない。
- S B05 東西2間、南北3間の側柱の掘立柱建物である。柱間は約2.0m~2.3mである。遺構内からは遺物は出土していないが、他の掘立柱建物と異なり埋土が暗茶褐色であり、他の建物と同様に黒褐色の埋土のピットを切っているので調査区内では最も新しい建物であると思われる。

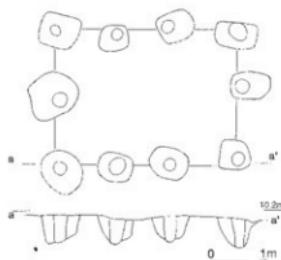


fig. 182 SB01 平面図・断面図

- S B06 南北2間、東西3間の側柱の掘立柱建物である。柱間は約1.8m~2.0mで、遺構内からは時期を決定するような遺物の出土はなかった。
- S B07 南北4間、東西2間以上の側柱の掘立柱建物である。南北の柱間が1.3m~1.5mであるのに対して、東西の柱間は1.8m前後と広い。なお、遺構の時期を決定するような遺物は出土していない。
- S B08 東西2間、南北1間以上の側柱の掘立柱建物である。遺物は出土しなかった。
- S B09 東西2間以上、南北3間以上の側柱の掘立柱建物であると思われる。柱間は1.5m~1.8mである。時期を決定するような遺物の出土は見られなかった。
- S B10 南北1間以上、東西2間以上の掘立柱建物である。柱間は1.2m~1.3mをはかる。遺構に伴う遺物は出土していない。
- S X01 当初、土坑状の遺構と考えていたが、調査の過程で溝状の遺構であると判明した。調査区を南北に走り、溝の底部は工具痕が残っていた。埋土の上層から須恵器の大甕破片および土師器片が出土しており、時期は古墳時代の後期であると思われる。
- S D16 S X01を切り南北に走る溝である。時期を決定するような遺物の出土は見られず、遺構の時期、性格とも不明である。



fig. 183 第2遺構面 掘立柱建物群



fig. 184 第2遺構面 全景



fig. 185 第2遺構面 SB01・02

3. まとめ

今回の調査では、約200m²と限られた調査面積に問わらず、古代のものと思われる掘立柱建物が10棟確認できた。掘立柱建物群は、座標北にはば並行するものと、現在の北にはば並行するものの大きく2方向に展開するものがあり、時期を限定する一つの要素となるかもしれない。また、隣接した第11次調査地では古代の比較的大型の掘立柱建物が確認されており、この付近一帯が古代の中心的集落であった可能性もある。

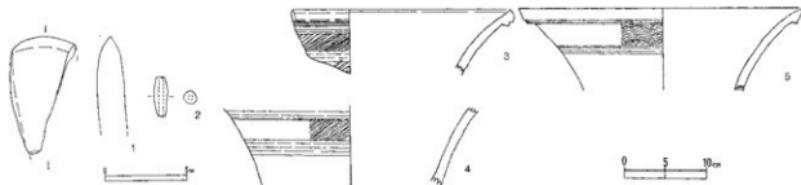


fig. 186 SX01 出土遺物実測図 (1:石斧 2:土器 3~5:須恵器縦)

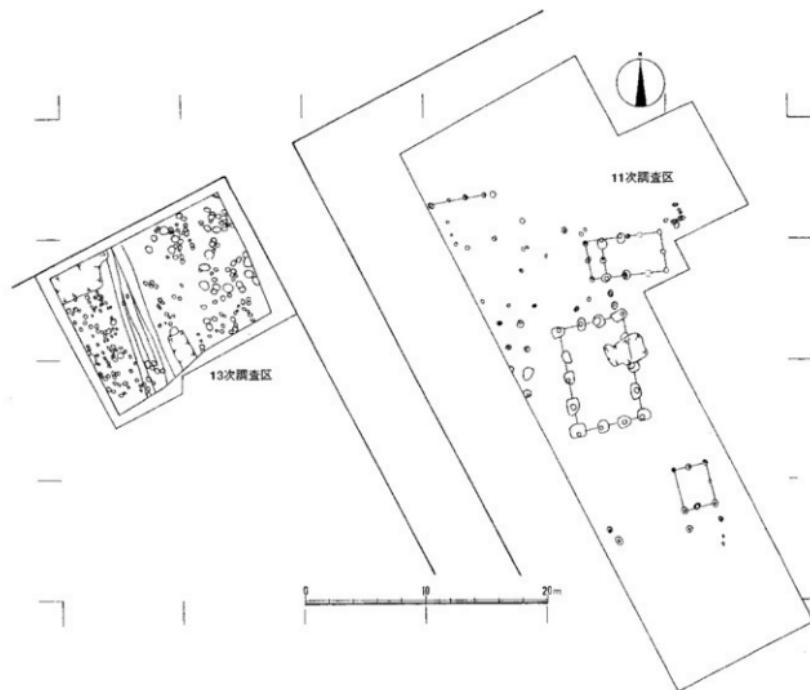


fig. 187 第11次調査地との位置関係図

1. はじめに

雲井遺跡は、生田川によって形成された複合扇状地の末端に近い緩傾斜地（現地表標高12.5~15.0m）に立地している。雲井遺跡の調査は昭和62年度に実施された雲井通6丁目の再開発ビルの建設に伴う調査を端緒にして、7次にわたって調査が実施されてきた。過去の調査では、弥生時代中期の周溝墓群及び縄紋時代晚期~弥生時代前期の遺構・遺物、縄紋時代早期~後期の遺構・遺物が各調査区で発見されている。今回の調査地南隣で実施された第7次調査地では、中世の掘立柱建物や弥生時代の周溝などが検出されている。

今回の調査は、建設予定の建物の基礎工事が北面の歩道面から1.38mまでの深さに止まることから、基礎工事に伴う影響深度までを調査対象として実施した。



fig. 188
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

調査の結果、工事影響範囲内で3面の遺構面を検出した。

第1遺構面は、旧耕作土・床土直下で検出した灰黄色細砂を基盤面としている。この第1遺構面は、第7次調査第1遺構面の中世掘立柱建物を検出した面に相当するが、今回の調査では遺構は検出されなかった。

第2遺構面は、古墳時代後期~奈良時代の遺物を含む灰黄色細砂（第1遺構面基盤層）直下の黒褐色シルト質極細砂を基盤面としている。

第3遺構面は、弥生土器のみを含む黒褐色シルト質極細砂（第2遺構面基盤層）直下の極暗褐色シルト質極細砂を基盤面としており、周溝墓3基を検出した。調査は工事影響深度の関係で、周溝墓の埴丘土を除去して終了したが、調査区中央にトレンチを設定して、下層の確認調査を実施した。その結果、埴丘下の暗茶褐色シルト質極細砂から、弥生時代前期前半と考えられる壺形土器と、その下面の暗灰色シルトから掘り込まれた落ち込み2ヶ所を検出した。確認調査は第3遺構面から85cmの明褐色シルト質極細砂面まで確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。

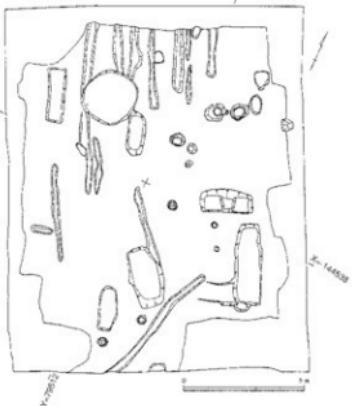


fig. 189 第2遺構面 平面図



fig. 190 第3遺構面 平面図

第2遺構面 検出した遺構は素掘り溝12条、柱穴13基である。素掘り溝は断面U字形で、幅10cm、深さは5cm前後である。柱穴の掘形は直径20~90cmである。建物の存在は予想されるが、調査地内ではまとまらなかった。遺物は古墳時代後期から奈良時代の土器が出上した。

第3遺構面 第3遺構面は第2遺構面を除去して検出した。検出遺構は溝4条、土坑5基である。

周溝墓1 溝1(S D301)に囲まれた直な方形ないし長方形を示すと考えられる周溝墓である。台状部、東西5.05m、南北7.1mを測る。台状部には約20cm程の盛土が認められ、盛土内には細片化した弥生土器が包含されている。

溝1は東西5.7m、幅1.8~2.0m、深さ0.24m、南北6.0m、幅1.3m、深さ0.13mを計測する。北東隅は溝3(S D303)によって切られている。溝1の台状部の北側には弥生時代前期後半の土器が一括して出土した。

主体部は台状部上で1基、台状部の東側の溝1の内部で2基検出した。第1主体部(S X302)は約半分が調査区外へ伸びるため、東半分を検出した。掘形の長軸1.8m以上、短軸2.0m、深さ0.15mを計測する。掘形の中央に木棺痕跡を検出した。木棺痕跡は長軸1.5m以上、短軸0.98mである。この主体部上では、ほぼ完形の甕が土圧で押し潰された状態で出土し、ほぼ木棺の上部にあたる位置には拳大の花崗岩礫が出土した。土器は主体部上に置かれた供獻土器と考えられる。花崗岩礫は標石の可能性が考えられる。第2主体部第2主体部(S X301)は台状部の東側の溝1内部に掘り込まれている。掘形は長軸2.3m、短軸1.1mの隅丸長方形で、深さ0.16mを計測し、長軸1.61m、短軸0.68mの木棺を納める。木棺の深さは0.12mを計測する。第2主体部の上部にも拳大の花崗岩礫、土器片が出土した。木棺は北側が狭く、南側が広いため、南枕であったと考えられる。第3主体部(S X305)は、長軸2.6m、短軸1.2m、深さ0.16mの不整形の掘形に、長軸1.85m、北側の短軸0.65m、南側の短軸0.85m、深さ0.12mの木棺を納める。木棺の南西隅に、木棺の側板を支えたと考えられる平板な石材が出土した。南枕と考えられる。

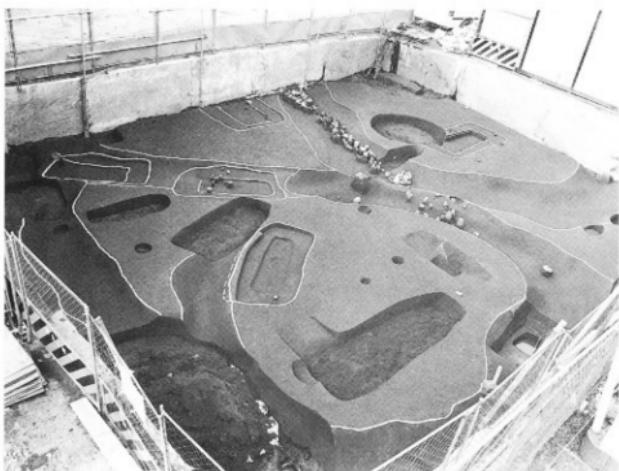


Fig. 191
第3遍構面全景

周溝墓2 周溝墓1と溝1を共有し、溝2(S D302)に囲まれた、不整形な周溝墓である。約半分が調査区外に伸びるため、規模は不明である。台状部には20cm前後の盛土が行われている。

溝2は幅1.3~2.2m、深さ0.16m計測する。平面形態は不整形な弧を描く。溝内からの遺物の出土は少ないが、墳丘の肩部に完形の甕が1点、土圧で押し潰された状態で出土した。台状部の中央やや南よりで主体部(S X303)を検出した。掘形は長軸2.7m、短軸1.35mの隅丸長方形で、深さ0.25mを計測する。掘形の中央に木棺痕跡を検出した。長軸1.86m、短軸0.75mで南に向かって広がるが、南端は後世の擾乱によって破壊されているため、規模は不明である。木棺内からは少量の土器の細片を除き、遺物は出土しなかった。主体部の上部、特に木棺の上部では、やはり拳大の花崗岩砾および弥生土器の集中がみられた。

周溝墓3 周溝墓1の溝1を切る溝3(S D303)に囲まれる不整形円形の周溝墓である。台状部は直径6.10mの不整形な円形である。台状部は0.2m程の盛土をおこなっており、弥生土器の細片が包含されている。

溝3は、幅0.80~1.20m、深さ0.20m程で、台状部の西側で途切れ、陸橋状になっている。台状部の北側では弥生時代前期後半の土器が出土した。また、溝の底面が下層の遺構面を切っているため、縄紋土器も出土した。台状部の西よりで主体部(S X306)を検出した。掘形は、長軸2.50m、短軸1.40m、深さ0.25mを計測し、その中央で木棺痕跡を検出した。木棺は長軸1.80m、短軸0.53m、深さ0.25mを計測する。木棺内からの遺物は出土しなかった。台状部中央からは、主体部は検出されなかったが、中央部が擾乱を受けており、削平を考慮すれば、主体部が存在した可能性が考えられる。

第4遺構面 面的な調査は行わなかったが、周溝墓3の周溝である溝3の北西の溝底で、下層の遺構面に掘り込まれている柱穴を2基確認した。この遺構の時期は前述の溝3の底で出土した縄紋土器の東約1mの地点にあることから、縄紋時代のものである可能性がある。

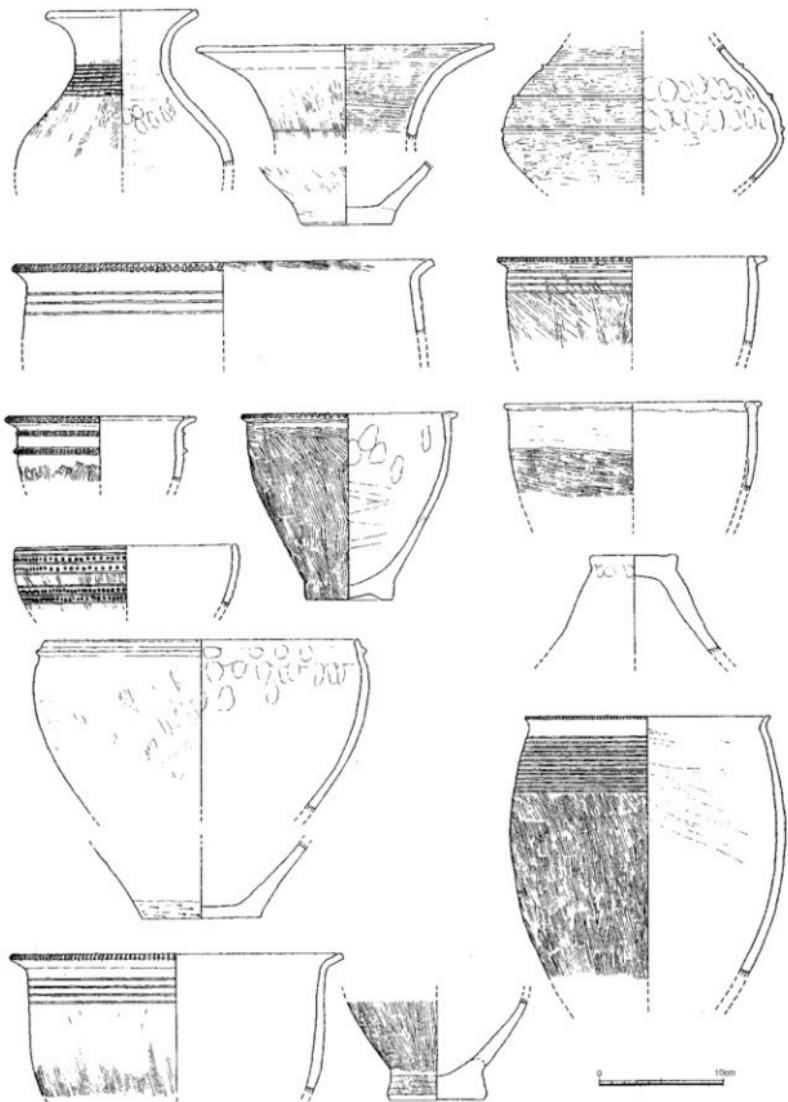


fig. 192 周溝墓出土土器実測図

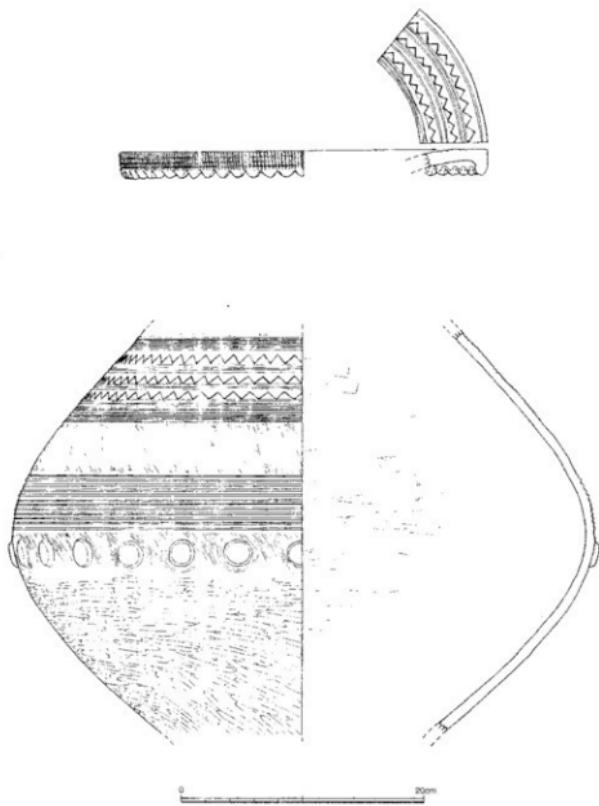


fig. 193 周溝墓出土土器實測圖

3. ま と め 今回の調査では、第2遺構面で古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物の柱穴の一部を検出した。今まで、雲井遺跡では古墳時代後期～奈良時代の集落の存在は確認されておらず、遺跡北東部にあたる今回調査地点周辺に当該時期の掘立柱建物を中心とする集落が存在したであろうことを示す初例である。このことは、旧生田川左岸に点在していたといわれる生田町の古墳群被葬者の居住地を推定するうえで一つの手掛かりを得たといえる。

従来、雲井遺跡は弥生時代中期に周溝墓を主体とする墓域を形成する遺跡として知られてきた。しかし、今回の第8次調査では、弥生時代前斬新段階の周溝墓群を検出した。その有り様の特徴は、溝を共有しながら連続して墓域をつくり、周溝内へも木棺の埋葬を行う点である。このような墓域の形態は、弥生時代前期に遡る周溝墓の中では特異な例といえる。けれども、遺跡西部での第1次調査で検出された弥生時代中期の周溝墓群も基本的には弥生時代前期の本調査例と同質の様態と考えられよう。従って、雲井遺跡の弥生時代の造墓集団は、弥生時代前期以来連續と中期にいたるまで、造墓地を移動させながら、ほぼ同一墓制を採って墓域を形成していったとも考えられる。今後の周辺部の調査をまって検討していく必要がある。

今回検出の弥生時代前期後半の周溝墓群の墓域は、第4次調査弥生時代前期遺構面で検出されている不定形周溝にみられるように、旭通5丁目付近まで抵がる可能性がある。

なお、今回の調査は工事影響範囲内に限定したが、トレンチ調査で下層の遺跡の状況を一部確認した。調査範囲外の下層では、弥生時代前期前半・縄文時代後期の土器とビットを検出した。付近における従前の調査でも検出されており、今回の調査地付近に相当の拡がりをもつ同時期の遺跡が存在すると考えられる。今後、調査にあたっては留意が必要である。

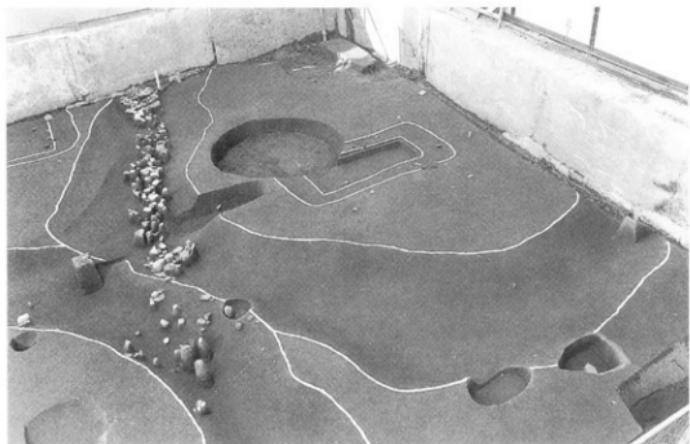


fig. 194 周溝墓 2

(付録) あら なちょう 27. 楠・荒田町遺跡 第14次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は旧湊川左岸に位置する。今日の行政区画では神戸市中央区楠町6丁目および兵庫区荒田町1丁目を中心広がり、縄文時代後期から鎌倉時代にかけての複合遺跡であることが判明している。今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、事前の試掘調査の結果から弥生時代後期、中世の遺物を含む包含層が確認され、本調査の必要があると判断された。調査は、計画建物の基礎工事部分に限り実施することになった。

fig. 195
調査地位図
1:2,500



2. 調査の概要

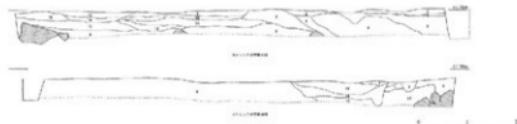
計画建物の基礎工事影響深度は、最大で地表下約2.7mまで、遺物包含層は地表下約2.4mで確認されている。深いところでは、2.4mまで掘りさげた。この時点では近現代の井戸、土坑を確認し、弥生時代後期の土器片が散見された。

基本層序

調査区の堆積状況を概観すると、8層の上石流が地形に沿って、北東から南西に流れ、これを切る形で調査区西側を自然流路が南方へと流れている状況を呈している。10. 12. 18層もこの自然流路の堆積土であるが、突発性の上石流の痕跡と考えられる。

Eトレチ南側断面で認められた17層の黒色土は、粘性の強い腐食土である。遺物包含層と思われたが、遺物は全く検出されなかった。Cトレチ東側断面でも確認され、やはり、南方へ流れをとっていた自然流路と考えられる。他の層も同様な堆積状況で、調査地は、数回の上石流が繰り返し起こっていたことが窺える。

fig. 188
調査地位図
1:2,500



- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1. 暗灰緑褐色土 | 7. 暗灰色土 | 13. 暗灰緑褐色土 |
| 2. 淡褐色土 | 8. 淡緑灰色土 | 14. 暗灰緑褐色土 |
| 3. 暗灰緑褐色土 | 9. 暗黒茶色土 | 15. 暗黒茶色土 |
| 4. 灰褐色土 | 10. 暗灰緑褐色土 | 16. 灰綠色土 |
| 5. 暗灰こげ茶色土 | 11. 黒茶色土 | 17. 黒色土 |
| 6. 暗灰こげ茶色土 | 12. 淡緑灰色土 | 18. 暗黒色土 |

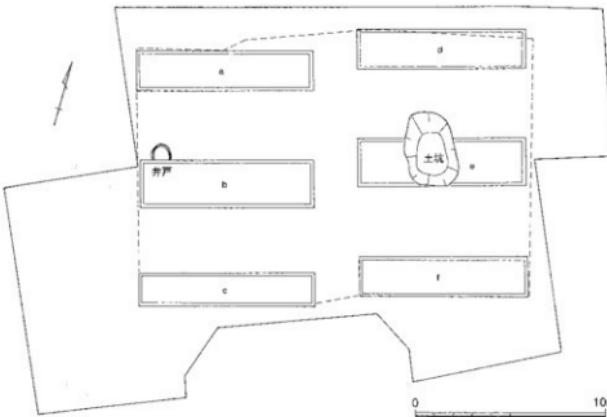


Fig. 197 調査区平面図

出土遺物 遺物はトレント上面、標高19.5m付近で散見され、弥生土器、9世紀代の須恵器等が細片で出土したのみである。盛土を除去した後の標高19.5m付近のレベルは、井戸や土坑が検出されている点から、近現代においては、畑地として利用された可能性がある。その際に遺物の一時的な流入が生じたと判断される。

検出遺構 遺構としては、遺物と関連するものではなく、近現代の井戸と土坑が確認された。共に地山の暗灰色砂質土を掘り込み、井戸は水溜め、土坑は耕作の際に石などを投棄した跡と考えられる。

井戸は直径約60cm、深さ約50cmの規模で、幅約12cm、長さ約48cmの板材を12枚立てて円形に配置した井戸枠が残存していた。板材の上面小口が僅かに認められるため、本来の掘り込みの高さと大きく違わないと思われる。内部には、煉瓦や瓦、ゴミが堆積しており、弥生土器片も混入していた。

土坑は、eトレントの中央で検出された。長径3.4m、短径2.6m、深さ65cmの規模で、径60~80cmの大塊石が3個廃棄されており、埋土1層、2層の暗青灰色砂質土に弥生土器、須恵器、青磁が含まれていたが、これらは流れ込みの堆積と考えられる。

3.まとめ

今回の調査では調査区内のほとんどが、過去に数回の土石流を被っており、混入遺物として、埋土下層で弥生土器（後期末）、9世紀代の須恵器が採集されたのみであり遺構、遺物密度が極めて希薄であった。

従来の調査で特に指摘されているような弥生時代や平安時代の遺構は確認できず、試掘調査時に、おそらく比較的遺物を含んでいた土坑の一部を掘削したため、これを調査区内に広がる遺物包含層と判断したと思われる。

ただし、土坑内の遺物を現段階で検討すると、箸や青磁、13世紀代を中心とした京都系の折り曲げ口縁部を持つカワラケなどが出土しており、福原京を想起させる資料として注目される。

28. 兵庫津遺跡 第6次調査

1. はじめに

兵庫区の沿海部は、古くは大輪田泊と呼ばれ奈良時代頃から港として利用されていた。特に、平安時代後期には平清盛によって国際貿易港として繁栄をするが、その後、その地位を堺に譲ることになる。

その後、中世末期の兵庫城築城に伴い城下町が形成され、再び賑わいを取り戻し、近世に至っては幕府の直轄領となり、幕末の兵庫開港に続く。

今回の調査は住宅建設に伴うもので、遺構こそ確認されなかったが、弥生時代～近世の遺物などが確認された。調査地は福厳寺境内の北隣に位置している。



fig. 198
調査地位位置図
1:2,500

2. 調査の概要

調査は、計画建物の工事影響範囲について実施した。残土置場の関係上、調査区域を3分割し、順次調査を進めた。いずれの調査区においても遺構あるいは遺構面となる層位は確認されなかった。

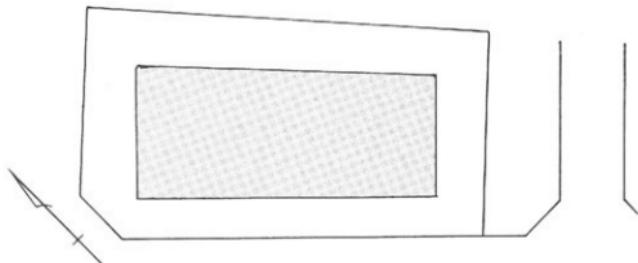


fig. 199
調査範囲図

1:300

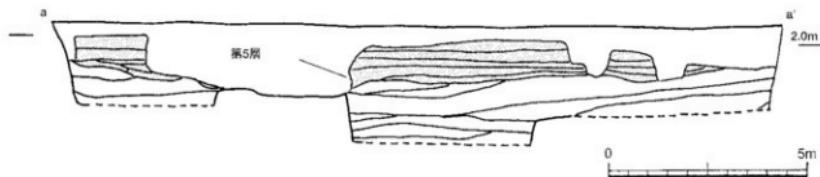


fig. 200 調査区断面図（トーンは整地層、下層は砂堆層）

基本層序 上層より大きく現代盛土、整地層、砂堆層の順になっており、整地層より中世～近世の遺物が数多く確認された。

出土遺物 大半が整地層からの出上で、そのほとんどが瓦と土師器皿である。中世末～近世のものが出上っているが、近世のものが比較的多い。土師器皿については、ほとんどが15世紀後半頃のものと考えられる。その他、近世の陶磁器類なども出土している。

fig. 201-1～4は、第5層灰茶色細砂～中砂（整地層）出土の軒平瓦である。1・2は、唐草文軒平瓦で両破片を基に図上復元したものが4である。その復元によれば、外縁に沿って界線を施し、その内側に均整唐草文を配するものである。3は、波状文軒平瓦であり、その波状文は流水的な様相を呈する。

また、第10層淡茶色粗砂、砂堆層より弥生土器が1点出土しており、時期の詳細は細片のため不明であるが、弥生時代前期前半の可能性が高い。

3.まとめ

今回の調査では遺構が確認されなかったものの、整地層からではあるが、中世末～近世の遺物が確認されたことは、中世以降の兵庫津の実態を考える上で大きな成果であったと言えよう。特に、土師器皿を中心とした15世紀後半頃の遺物が数多く出土したことは、今後において、中世末の兵庫津の様相を知る上で重要である。

元禄時代の兵庫津絵図においては、当調査地は14世紀代に創建された福嚴寺の境内に位置するものと考えられ、出土した瓦や土器類も当寺院の盛衰を物語るものであろう。

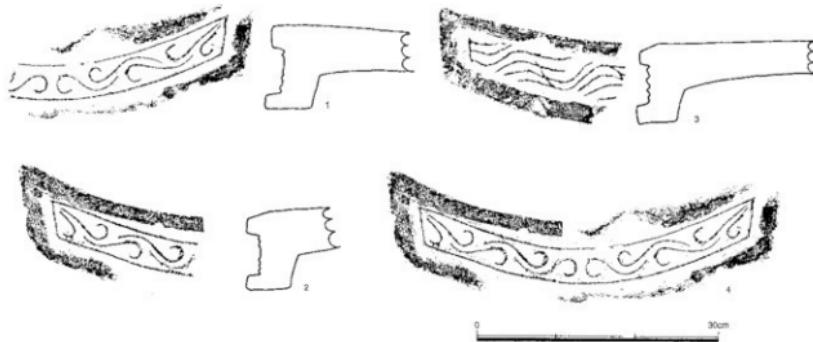


fig. 201 第5層灰茶色細砂～中砂（整地層）出土軒平瓦 実測図

29. 兵庫津遺跡 第7次調査

1. はじめに

兵庫津は平安時代末に平清盛が日宋貿易の拠点として大輪田の泊を修復し、鎌倉時代の東大寺僧重源が経ヶ島を修築してから、港として確固たるものになったとされる。そして対明・対朝鮮貿易で繁栄したが応仁・文明の乱で大きな打撃を受け、埠港にその地位を奪われることになる。

兵庫が復興するのは池田信輝がこの地に城を築く天正年間と考えられている。しかし、この後慶長元年（1596）震災により再び被害を受け、江戸時代に入ってようやく栄えるようになつたと考えられている。

今回の調査は、個人住宅の震災にともなう建て替え工事に先立つて実施されたものである。試掘調査の結果から、近世と思われる鍛の羽口が出土しており、近世段階の鍛冶屋町の鍛冶屋の様子が明らかにされるであろうと予測された。



fig. 202
調査地区図
1:2,500

2. 調査の概要

調査区内は幾らかの擾乱を受けていたが、その他は良好に遺存していた。

礎石建物

検出した遺構は、鍛冶に関する遺構であり、面積の関係からその一部を検出したものとみられる。調査区全面は焼土に覆われていた。

調査区の東半部では、礎石が2間×2間以上確認されている。東端部では、礎石が2段に重なって検出されていることから、建て替えがあったものと見られる。下段の礎石には赤く焼けた焼土の帯の中に小さな竹の穴が一列に並んで検出されており、木舞の痕跡と考えられる。これらから礎石に伴う柱と柱の間には土壁が存在していたものと考えられる。その土壁の西側には砂が敷き詰められており、砂の上面には、焼土が散在していた。

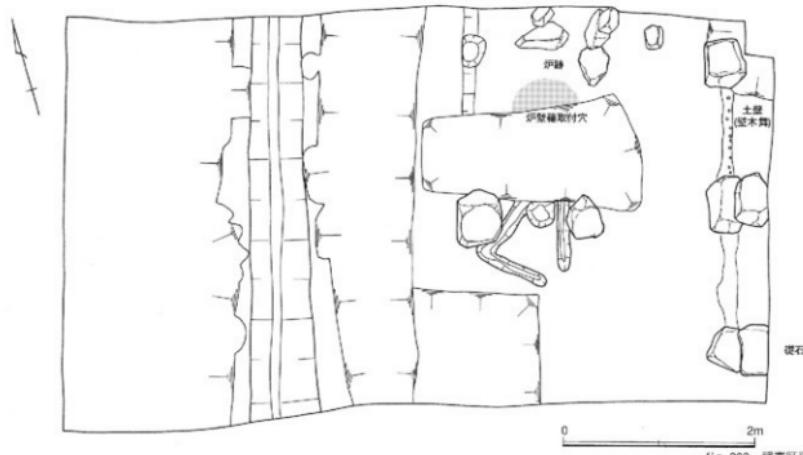


fig. 203 焼窯区平面図

鍛冶工房

中央部の北側には、炉跡とみられる石組みが存在しており、その石組みに粘土状の土を張りつけていたとみられるが、いずれも高温でよく焼けている。炉跡とみられる石組みの南側は焦土塊で塞がれているが、その焼土塊の西端部分には、直径5cmほどの穴が開いていた。この穴は、爐の羽口の取りつき穴とみられる。この焼土塊の西側、炉の南西側は塞がってはなく、灰の堆積が認められた。このことからこの部分が炊き口と考えられる。残念ながら、炉の上部は削平を受けており、不明である。なお、爐の羽口は、南東方向に取りついていたものとみられる。

炉の南側は作業所と考えられ、敷きつめられた砂の上面が高温で良く焼けていた。その近くで、水溜めとみられる漆喰製品が確認されており、打鉄・鍛練の場所と考えられる。炉の西側には良く焼けた面が確認された。この部分は浅い溝状に床を掘削めたあと、細い竹を敷きその上に粘土を張って、湿気が上に上がるのを防ごうとしていたようである。



fig. 204 鍛冶工房作業場



fig. 205 炉壁取付け穴

出土遺物 出土遺物としては、青磁の他、すり鉢・壺・徳利・皿・羽釜等が出土している。また、焼土層内やその下面から、寛永通宝が21枚以上出土している。

なお、下層に関する確認調査も合わせて実施したが、焼土が何層も存在していた。少なくとも4時期以上存在するとみられるが、焼土の分布範囲がほぼ同じ位置にあり、作りなおす際に、以前の状況の制約があったものとみられる。また、土器の上からは、いずれも江戸期のものとみられ、最下層の焼土をふくめても短時期の内に納まるものとみられる。



fig. 206 調査区全景



fig. 207 調査区西半 深い溝上に木質を敷いていた。鍛冶工房作業場に伴う施設の可能性がある。木質は、炭化しており写真は、その除去後の状況

3. まとめ

調査面積の関係から全体像を掴むまでには至らなかったが、鍛冶工房の一端をあきらかにすることことができた。床面は、水はけを良くするために砂を入れ、その上に木舞または、木材をひいてその上に粘土を敷いて床面を作っている状況が観察できた。鍛冶炉その他の施設は、北に炉を作り南側で鍛練していたようである。炉そのものは、確認できたものは1基であるが、検出した面の内だけでも2回の炉の作り替えが観察できている。下面の検出した面数からみても幾度となく作りなおされていった状況が窺われる。

鍛冶屋町の地名は江戸期には存在していた様であるが、実際にこの地で鍛冶が行われていたのが、いつのころからであるのかは余りよくわかつていない。しかし、今回の調査で確認された遺構や、出土遺物・寛永通宝からみて、17世紀代にはすでに鍛冶がおこなわれていたことが明らかとなった。下層の状況からみるとそれに若干さかのぼりうることは確實とみられる。

江戸期の絵図によるとこの調査区の周辺は鍛冶屋町のほかに魚柵町や小物屋町といった地名がみられ、周辺に店が軒を連ねていたことが見受けられる。今回の調査によってその町家の一端を垣間見ることができた。



fig. 208 鍛冶工房作業場と礎石

ひょうごつ 30. 兵庫津遺跡（工事立会調査）

1. はじめに

兵庫津遺跡は旧湊川の河口付近にあり、古くからの瀬戸内航路の基幹港として栄えた大輪田泊=兵庫津関連の遺跡である。西柳原町には西国街道西忽門跡があり、海路だけではなく、陸上交通の要衝でもあった。今回の調査地は旧湊川の西側、元禄9年・文久2年の絵図では西国街道と船入江を中心として広がる兵庫津の町並みの一角に当たる。平成2年度、付近の西仲町で行われた発掘調査では鎌倉時代～江戸時代の遺構・遺物が確認されている。



fig. 209
調査地位図図
1:5,000

2. 調査概要

今回の調査は国道2号線の共同溝敷設に伴うもので、幅約1mの污水管の埋設工事に立ち会い、土層層序・遺構の確認、出土遺物の回収を行った。その結果、D区からG区にかけて多量の遺物を含む遺物包含層、各種の遺構が存在することを確認した。

兵庫町1丁目

(A～C)

地表下約2mの淡灰褐色シルト質細砂層から遺物が出土した。地形は東の旧湊川に向かって下がっており、A区で旧湊川流路に伴うものと推定される湿地状の堆積が確認されたが、ここからの遺物の出土はなかった。なお、C区で工事中に完形の備前焼水屋壺が出上している。

兵庫町2丁目

過去の埋設管設置工事による破壊で遺物包含層の確認はできなかった。

三川口町1丁目 D・E区では、地表下約2m前後で良好な遺物包含層と遺構を確認することができた。

(D～F) 遺物包含層は暗褐色シルト質細砂及び暗褐色細砂層で、その下面で溝やピットなどの遺構が確認できた。遺物包含層や遺構内からは中世末期（15～16世紀）のかわらけを中心とする遺物が多く出土している。

F区でも多量の遺物が出土した。重機の上げ土中から回収した遺物がほとんどであるが、古墳時代から現代にいたる各時代の遺物が出土している。

工事掘削溝の壁面および底面の観察によって以下のことが確認できた。盛土・搅乱土・焼土層が約1.0mと厚く、2層の褐色シルト質砂（地表下約1.0～1.3m）が近世～近代の地表土と考えられる。遺構としては井戸瓦を用いた瓦積みの井戸が確認された。3層の灰褐色シルト質砂（地表下約1.3～1.8m）は中世？の地表土。4層の褐色シルト質砂（地表下約1.8m）の下面で平安時代末の遺構が確認された。確認された遺構には溝・土坑等がある。幅約3mのS D01からは石鍋・かわらけ等が出土している。5・6層は浅黄色を呈する洪水砂層で、その間に土壤化の進んだ6層（厚さ2～3cm）がはさまれる。6層からは完形のかわらけが複数出土している。

門口町
(G～H) G区の東寄りで遺物包含層・遺構を確認した。遺物包含層は地表下約2m前後にある暗灰褐色細砂層で、その下面で遺構がされる。中世末期（15～16世紀）のかわらけを中心とする遺物が出土している。

西柳原町
(I) ベース層である淡褐色細砂層まで搅乱をうけており、遺物包含層・遺構は確認できなかつた。

3.まとめ 今回の調査は工事の立ち会い調査であり、得られたデータも不十分なものであったが、それでもなお兵庫津遺跡についての重要な知見を得ることができた。

F区で平安時代末期・福原京の時代の遺構・遺物が多く確認されたことがその第一にあげられる。兵庫津＝大輪田泊は五泊の一つとして数えられるなど古代から港として繁栄しており、各時代に港の修築が行われている。奈良時代の行基・鎌倉時代の重源によるものの他、平安時代末に平清盛によって人がかりな修築・経ヶ島の築造が行われていることが知られている。しかし、考古学的にはこれまで平安時代末・福原京の時代の遺構・遺物が兵庫津遺跡で確認されていなかった。これが今回確認されたことは特記すべきことである。

また、平安時代末にひきつき鎌倉時代・室町時代、特に15～16世紀の遺物が多く出土し、遺構も確認されたことも注目される。もちろん江戸時代の陶磁器・瓦類も多く出土しており、これらは元禄9年・文久2年の兵庫津絵図に示されるような湊川河口付近に広がる繁華な町並みがこの周辺で長く続いていることを示す資料となるだろう。

中国製の磁器・石鍋・備前焼・東播磨系須恵器・東海地方系陶器など将来された遺物の出土は港という物資の集散地としてのこの遺跡の性格をよくあらわしている。

早くから市街地化し、第二次世界大戦の戦災を大きく受けた当地域であるが、洪水砂や盛土等により遺跡が比較的深く埋没しており、遺物包含層・遺構面が良好な状態で遺存している可能性の高いことが今回の調査によって判明した。また、大輪田泊＝兵庫津の歴史を考える上で重要な時期の遺構・遺物が層位的に確認され、周辺での今後の調査の進展が期待される。

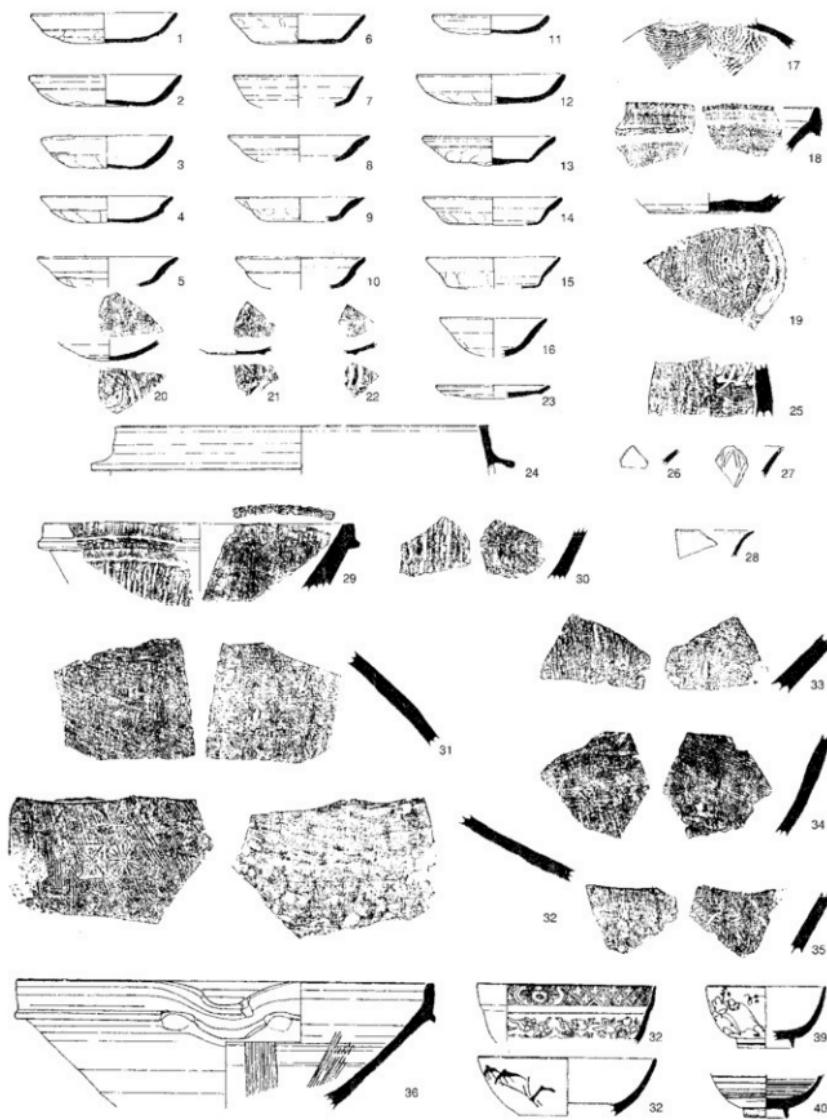


Fig. 210 出土土器 実測図(1)(F区)

1~3・6: 6層、5・7~9・11~13~15・17・20・21・23・24・28・30: 5~7層、12・29・31・34: SD01、4・10・16・18・19・22・25~27・32・33・35・36: 不明(上げ土中)、37~40: 1層、1~16: 土器、17~19: 瓢箪器、20~24: 瓦器、25: 灰釉陶器?、26・27: 青磁、28: 白磁、29・30: 石鍋、31~35: 腹器(東海系多し)、36: 備前焼、37・38: 有田焼、40: 唐津焼

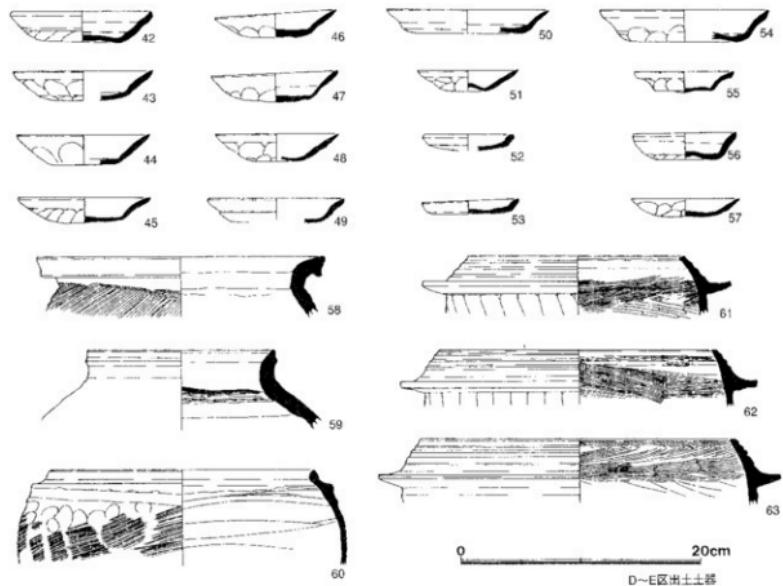
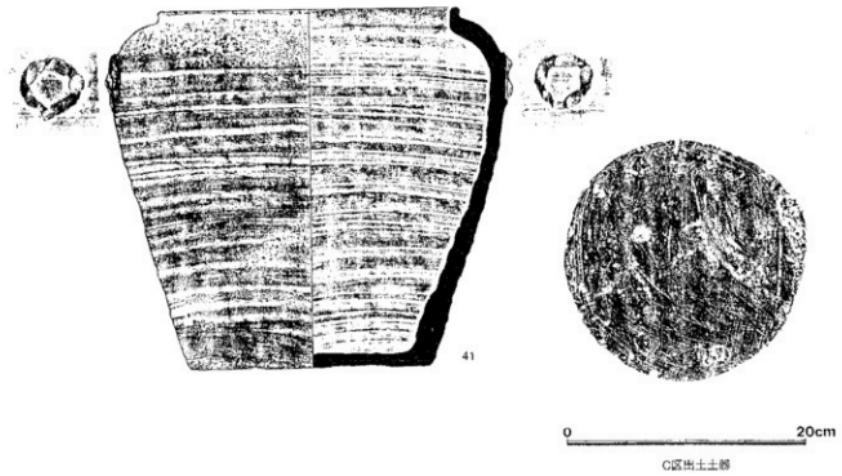


Fig. 211 出土土器 宋漢國（2） 41：罐前燒、42～57・60：土師器、58：須底器、59：陶器、61～63：瓦器

31. 祇園遺跡 第6次調査

1. はじめに

祇園遺跡は神戸市兵庫区上祇園町周辺にひろがる遺跡で、天王川左岸の扇状地の扇頂付近に位置する。天王川は有馬道沿いに流下し平野部に抜け、石井川と合流して湊川となる。この湊川の河口付近にかつて大輪田泊があつたと言われている。

この遺跡の存在する地域はひらのとよばれ、この地名が治承4年の「福原遷都」に際し安徳天皇内裏となつた平清盛の別業のあつたという「平野」の地名と合致し、当地に福原旧都の中枢があつたものと推測される。しかし、考古学的な調査によって福原京に関連する遺構が確認された例は、平野から600mほど南の荒田の地で検出された掘をめぐらす邸宅跡（楠・荒田町遺跡〔神戸大学病院地〕）が唯一といつてよいほどで、福原宮の具体的な解明を行えるまでには至っていない。

祇園遺跡の調査は、平成5年度の神戸三田線拡幅工事に伴う調査に始まり、平成6年度の第2次調査、平成7年度の第5次調査において平安時代末頃、福原旧都当時のものと考えられる圍池をもつ屋敷地の一部が検出された。この他、周辺の調査においても福原旧都に関連する遺構、遺物が確認されている。

今回の調査は、共同住宅建設に伴うものであり、計画建物の工事影響範囲について実施した。調査地は、平安時代末期の圍池遺構が検出された5次調査の東100m程の距離に位置しており、緩やかに傾斜している台地上に位置している。

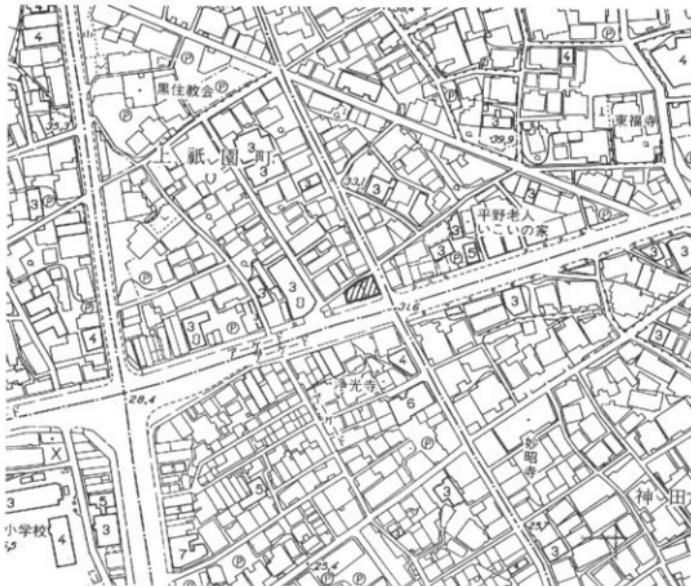


fig. 212
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要 今回の調査において、中世の遺物包含層を確認し、瓦を1点採集したが、遺構等は確認できなかった。主な遺構としては、弥生時代の溝2条のみである。

S D01 調査区西端に位置する、南北に走る溝である。規模としては、幅1.2m 深さ0.6mを測る。西側の壁はほぼ直に落ちるが、東側の壁は、ゆるたかに立ち上がるものである。

出土遺物としては、弥生土器縦年のIV様式と思われる物が出土している。

S D02 南北に走る溝である。規模としては、幅1m 深さ0.3mを測る。出土遺物としては、弥生土器縦年のIV様式と思われる物が出土しており、時期としてはこの頃と考えられる。

S X01 規模としては、最大幅2.4m 深さ0.5mを測り、不整形である。内部に拳大の礫が出土している。時期としては、弥生時代と考えられる。

3.まとめ 今回の調査では、中世の遺物包含層を確認することはできたが、遺構は検出されなかつた。周辺の調査で確認されているような平安時代末頃の福原旧都の時代と考えられる庭園遺構や、遺物は確認できなかった。

今回確認できた遺構は、2条の弥生時代の溝であった。

従来の調査でも大量の土器が流路内で検出されていることからみて、周辺に大規模な集落が存在していた可能性が示唆されるが、今回の溝は、何れも地形に沿った形で築かれており、環濠集落の存在する可能性を覗かせているのかもしれない。

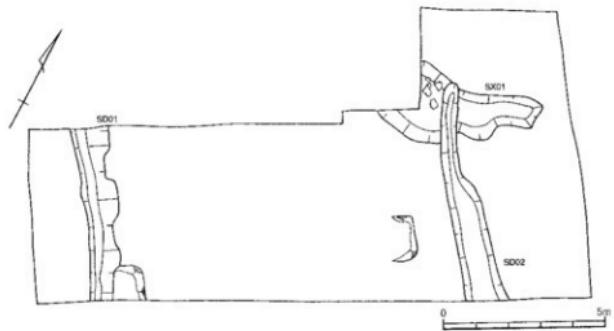


fig. 213 調査区平面図

だいかい 32. 大開遺跡 第7次調査

1. はじめに

大開遺跡は現在の海岸線から北方に2km、旧湊川が形成する沖積平野の微高地上に立地する。1988年の兵庫・大開小学校建設に伴う調査によって発見され、以後7次の調査が行われている。これまでの調査により縄文時代から近世にかけての複合遺跡と判明した。その中心は中世と弥生時代で、中世の遺構として溝状遺構・掘立柱建物など、弥生時代では前期の環濠・竪穴住居址・貯蔵穴などが確認されている。

当該地周辺は、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災によって大きな被害を受けた。今回の調査は、社屋再建事業に伴うもので、事前の試掘結果に基づき設計建物の範囲及び工事による掘削深度を調査対象に実施した。



fig. 214
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査地は、第1次調査地の北東150mに位置する。調査地の南北約50mには、第3次調査地がある。いずれも、中世ならびに弥生時代前期の集落址が確認されている。

基本層序

調査区内の基本層序は、以下のとおりである。

- 第0層 現表土・耕作土・戦災埋土・整地層 厚さ約90cm
- 第1層 黄灰色土層。近世遺構面（第1遺構面）・中世遺物包含層
- 第II層 茶灰色土層。中世遺構面（第2遺構面）・弥生時代遺物包含層
- 第III層 暗茶灰色土層。弥生時代前期遺構面（第3遺構面）・弥生時代遺物包含層
- 第IV層 茶灰色粘質土。最終遺構検出面・地山
- 第V層 暗青灰色中砂。やや粘性有り。
- 第VI層 暗茶褐色粘質土。
- 第VII層 暗茶褐色粘質土。
- 第VIII層 黒灰色粘土層。部分的に黒褐色・黄灰色土を含む。

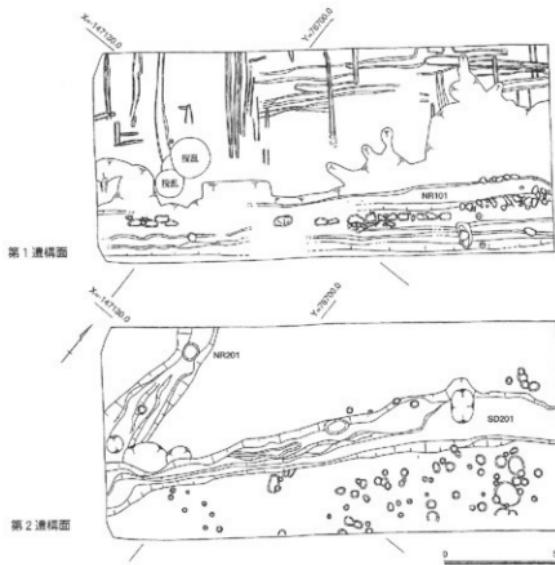


fig. 215 第1・2遺構面平面図

西調査区

近世の動溝10数条と近世～近代にかけてと思われる洪水による流路を検出した。遺物は、

第1遺構面

近世～近代の陶器類、流路からは弥生時代から近代までの土器類や石製五輪塔・石臼が出土した。五輪塔は、一石造りによるもので様式的には14世紀前後のものである。

第2遺構面

中世の柱穴群と2条の自然流路を検出した。

S D 201

調査区の中央をほぼ縱走しており、幅約2m、長さ約18mで調査区外へ延びる。深さは約0.3mである。溝内からは弥生時代から中世の土器や陶器類が出土している。

N R 201

調査区西端で検出した。北から南へ向かって形成されていて、S D 201と合流する。幅約2m、長さ約5mで調査区外へ延びる。深さは約20cmである。溝内からは、若干の中世土器が出土している。

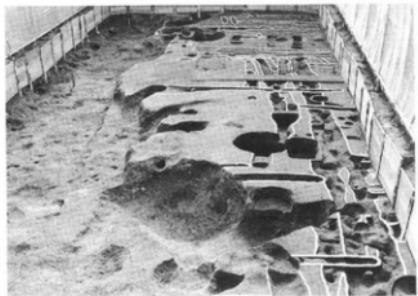


fig. 216 第1遺構面 全景



fig. 217 第2遺構面 全景